

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 吉田方

豊橋校区史

45

*Yoshidagata*









校区  
のあゆみ



吉前海岸のアジサシ（皿井 信 撮影）

吉田方

校区  
のあゆみ



総合体育館とアクアリーナ豊橋



豊橋市民病院



上渡津橋



野田処理場

校区のあゆみ



吉田方小学校



吉田方中学校



高洲若葉幼稚園



吉田方保育園



吉田方西保育園

校区  
のあゆみ



吉田方ふれあいウォーク



豊川クリーン作戦



野田素盞鳴神社の神楽



大葉栽培



六条潟



# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
吉田方校区総代会長

小 林 理

市制施行100周年を迎える記念すべき年にあたり、吉田方校区史を刊行することとなりました。編集委員を選任し、まず資料の収集から始めましたが、予想以上に時間がかかり、いつ執筆作業に取りかかれるのかと心配した時期もありました。また、校区の古老の方、地域の多くの先輩方のお話をお伺いしたり、各所に散在している記録や写真を探すことの苦労もありましたが、苦労の中にも楽しさや古い写真を見て昔話に夢中になる事もありました。

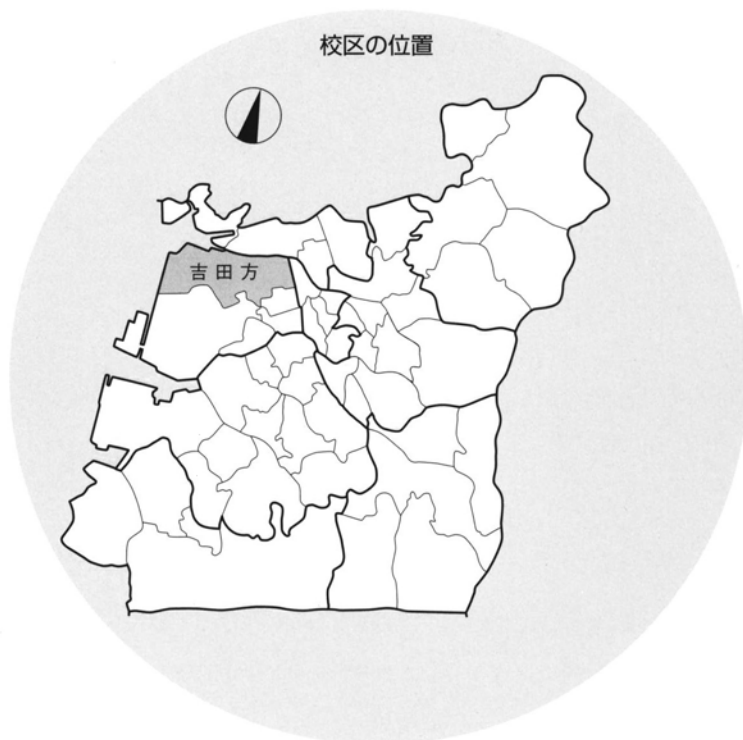
平成16年10月の第1回編集委員会以降毎回時間のたつのも忘れて原稿の執筆、校正作業などに熱心に取り組んでいただきました編集委員の皆様のお陰で、すばらしい校区史が発刊できましたことに大きな喜びと意義を感じています。そして、校区全体の方々に自分の生活する地域のなりたちや、発達の様子などを知るために少しでも参考になれば幸いと思っています。

これを契機として吉田方校区が次の100年に向かって新たな歴史を重ね、活気のある、また魅力のある校区として発展される事を願っています。

最後に、佐藤高名編集委員長をはじめ編集委員の各位、さらに編集にご協力をいただきました皆様方に改めて御礼を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

第1章 自然と環境		(8) 農業補習学校から青年学校へ	36
1 土地のようす	7	(9) 保育園と幼稚園	37
(1) 位置と範囲	7	(10) 吉田方小・中学校の校歌	37
(2) 地形・地質	7	2 社会教育	38
(3) 吉田方の成り立ち	7	(1) 社会教育委員会活動	38
(4) 土地の拡大と集落	8	(2) 市民館活動	38
2 気候と災害	8	(3) 青少年教育	38
(1) 気候	8	(4) ユニークな校区の活動	39
(2) 風水害	8	3 吉田方の文化財	40
(3) 洪水ハザードマップ	9	(1) 野田素盞鳴神社の神楽	40
(4) 地震	9	(2) 専願寺の大施餓鬼	41
3 植物(巨木・名木)	9	(3) 専願寺の薬師如来立像	41
4 道路・交通機関など	9	(4) 山田宗偏作の阿弥陀如来立像	41
(1) 幹線道路・橋・堤防	10	(5) 栄昌寺の馬頭観音立像	42
(2) 公共交通機関	10	(6) 野田素盞鳴神社の花鳥図絵馬	42
第2章 歴史と生活	11	4 吉田方の人物誌	43
1 吉田方校区のあゆみ	11	(1) 江戸時代	43
(1) 500年前までの吉田方	11	(2) 明治～大正時代	45
(2) 江戸時代の吉田方	13	(3) 大正～昭和時代	46
(3) 明治～大正の吉田方	18	教育関連資料 吉田方小・中学校の変遷	
(4) 昭和(終戦まで)の吉田方	20	歴代PTA会長一覧	49
(5) 戦後の吉田方	21	参考文献	51
(6) 新しい時代へ進む吉田方	23	編集後記	52
2 吉田方の産業	25		
(1) 農業の変容	25		
(2) 海の恵み	26		
(3) 商工業の発展	27		
第3章 教育と文化	31		
1 学校教育 保育園	31		
(1) 明治以前の教育 寺子屋と私塾	31		
(2) 学制発布と吉川学校の誕生	31		
(3) 現在地に吉田方尋常小学校がスタート	31		
(4) 豊橋市吉田方尋常高等小学校に	32		
(5) 豊橋市吉田方国民学校の時代	32		
(6) 豊橋市立吉田方小学校に	33		
(7) 西部第三中学校から吉田方中学校へ	34		

校区の位置



# 第1章 自然と環境

## 1 土地のようす

### (1) 位置と範囲

吉田方校区は豊橋市の西部に位置し、東の端はJR東海の東海道線を境界にして松葉校区と接し、南は豊橋面と呼ばれる洪積台地の崖下で花田校区と接し、西の端は三河湾に面し、北の端は豊川を境に津田校区と接している。総面積はおよそ8.25km<sup>2</sup>である（表紙見返し航空写真）。

### (2) 地形・地質

豊橋平野の臨海部には、豊川低地・神野新田低地・御津低地が存在し、吉田方校区は前二者の上にある。

豊川低地は、現豊川河道に沿う完新世の堆積による沖積低地である。このうち、豊川シルト質低地は菰口町・野田町・三ツ相町・吉川町・馬見塚町・高洲町に分布している。

神野新田低地は、主に豊川河口部の潮汐平地三角州（潮流によって作られた三角州）が近世から明治にかけての干拓工事によって陸化して生じた低地である。青竹町・吉前町・

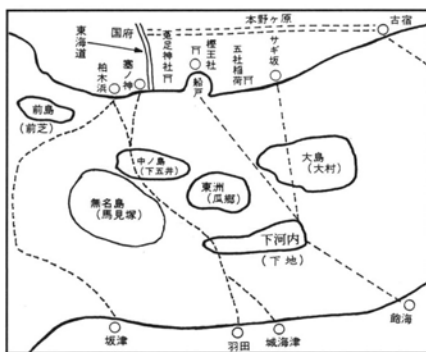
富久織町・問屋町・神野新田町・神野埠頭町がこれにあたる。表層は粗粒砂の沿岸漂移堆積砂層で成り立っている。

### (3) 吉田方の成り立ち

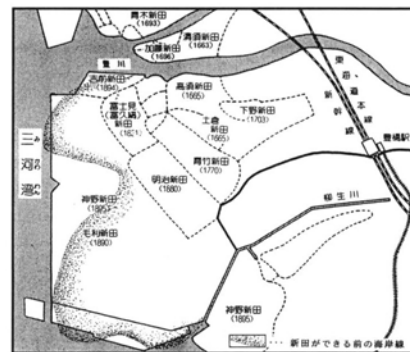
豊川兩岸の洪積台地には石塚貝塚や大蚊里貝塚などの貝塚が多く見られることから、縄文時代前期（紀元前四千年頃）の豊川河口部は、右岸を小坂井台地、左岸を牛川・豊橋段丘に挟まれた幅約4kmの入海になっていたと考えられている。

平安時代に志香須賀の渡しができた頃、豊川河口付近には（図1-1）に見られるような川が運んだ土砂によってできた幾つもの島（砂洲）が存在していたようである。

戦国時代、牧野古白が吉田城を築城した時に「馬見塚」（現在の吉田神社東側）の住人は豊川河口にあった吉田潟と呼ばれる干潟一帯の無人島に移住させられ、その地を「馬見塚」と呼んで開発を行った。江戸時代前期になると、「馬見塚」の周辺で干潟を利用した新田開発が始まり、米の収穫高が増え、農家数も増加した。これにともなって自然堤防上



1-1 平安時代の豊川河口付近（想像図）



1-2 豊川河口付近の新田分布

に立地していた村は馬見塚組・野田組・羽田組に分けられた。さらにその後には三ツ相村・吉川村もできた。

#### (4) 土地の拡大と集落

豊川の河口に広がる吉田潟という干潟は、海苔やあさりの大産地で、渡り鳥にもよい餌場となっていた。しかし、干潟は干拓や埋め立てをするにも都合の良い土地であった。そのため、江戸時代中後期には高須新田・土倉新田・茅野新田・牧新田・下野新田・梅村新田・青竹新田・富久縞新田が干拓され、明治時代になると明治新田・神野新田・吉前新田が干拓されて現在の範囲となった(1-2)。

大日本帝国陸地測量部が明治23年(1890)に測量し作成した我が国最初の2万分の1地形図(1-3)を見ると、明治初め頃の吉田方地区の地形の様子や集落の分布がよく分かる。この地形図から読み取ることができる集落は、野田・菰口・三ツ相・吉川・新栄・馬見塚・小向・高洲・青竹・富久縞の10村である。その後、大正6年(1917)に修正測図された5万分の1地形図では吉前・五号が加わり、道路を除いてほぼ現在の状態となったことを読み取ることができる。



1-3 明治20年頃の吉田方

## 2 気候と災害

### (1) 気候

夏8月の平均気温が約28℃、冬1月の平均気温が約6℃で東三河南部を代表する気温である。また、降水量は台風シーズンの9月に253mmと最も多く、初冬の12月に最低の36mmを記録する(1-4)。また、夏は南南東

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気温	5.7	5.9	8.7	14.8	19.3	22.5	26.7	27.9	24.6	19.2	13.4	8.2	16.4℃
降水量	76	50	115	123	139	182	176	121	253	135	91	36	1497mm

平成6年～平成15年の平均値(豊橋消防本部測量)

1-4 豊橋の気候

の風が、冬は「三河の空っ風」と言われる北西の季節風が吹きすさぶことが間々みられる。しかし、尾張地方の名古屋に比べれば、冬の平均気温は1～2℃暖かく、夏は1～2℃涼しいので過ごし易い気候であると言える。

### (2) 風水害

昭和28年(1953)9月25日、台風13号が三河地方を直撃した。これによって神野新田と吉前新田の堤防が決壊し、家屋や田畑が大きな被害を被った(1-5)。このとき吉前町の養鰻場は壊滅的な状態となった。吉田方小中学校の生徒の中に多くの被災者が出るなど深刻な事態を招き、9月30日から7日間、吉川

町の香福寺に臨時の収容施設が設けられ、その救援が行われた。

昭和34年（1959）9月26日、台風15号（伊勢湾台風）が東海地方を襲った。戦後の台風の中では最大規模のもので当校区も記録的な被害を被った。町民が神社や小学校の講堂に避難する地区もあった。暴風による被害が大きく、屋根瓦を吹き飛ばされたり、大木が折れたり倒れたりした。また収穫前の稲がなぎ倒され巨額の被害を被った。

戦後における豊橋市の水害記録をたどってみると、前記以外に昭和41年（1966）10月の界雷豪雨による洪水、昭和47年（1972）9月の台風20号による洪水、昭和49年（1974）7月の台風8号による洪水、昭和57年（1982）8月の集中豪雨による洪水が挙げられる。幸いにして、当地区では昭和49年の洪水以外は大きな被害を出さずに終わった。



1-5 猛威をふるった13号台風の惨状

### (3) 洪水ハザードマップ

風水害に関わる資料を基に平成16年（2004）に発行された、150年に1回程度の割合で発生が予想される豊川の洪水により浸水が予想される地域を示した「豊橋市洪水ハザードマップ」によれば、吉田方校区の三分の一は床下浸水に、三分の一は床上浸水に、残りの三分の一は一階の軒下まで浸水すると予測され

ている。このことから、当校区は全体が低地であることを常に念頭において生活することが求められている。

### (4) 地震

昭和19年（1944）12月7日、M7.9の東南海地震が発生し、愛知県下で死者368人、全壊家屋15,810戸を数えた。続いて、昭和20年（1945）1月13日にはM6.8の内陸直下型の三河地震が発生し、愛知県下で死者2,306人、全壊家屋16,408戸を数えた。いずれも余震が長く続き、当地区でも母屋には入れず、小屋などで寝泊りをする状態が続いた。なお、当時は戦時中であったため情報の統制が行われ、被害の詳細は明らかではない。

## 3 植物（巨木・名木）

吉田方校区内にも多くの巨木・名木が存在する。豊橋市が発行している「とよはしの巨木・名木百選」には、三ツ相町の水神社のイチョウ、野田町の素盞鳴神社のクスノキ、小向町のムクノキが挙げられている。町別に調査した資料によると、菰口町にはクスノキなど5本が、野田町にはクスノキなど3本が、三ツ相町にはイチョウなど6本が、吉川町にはイチョウ・イヌマキなど11本が、小向町にはムクノキなど3本が、新栄町にはタブノキ・ヤマモモなど15本が、馬見塚町にはイヌマキなど3本が、高洲町にはクスノキなど7本が、青竹町にはイヌマキなど4本が、富久織町にはセンダンなど2本が、吉前町にはイヌマキ1本が、五号（神野新田町）にはクロマツ2本があり、町民に親しまれている。

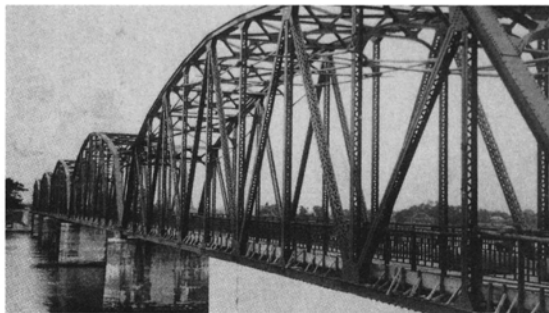
## 4 道路・交通機関など

### (1) 幹線道路・橋・堤防

明治23年（1890）に作成された2万分の1

地形図を見ると、吉田方村の主要な道路は、東豊田踏切から野田及び三ツ相を通り、馬見塚の専願寺に至る通りと、絹田踏切から野田の南側及び東豊田・吉川を通り、西豊田に至る通りであった（1-3）。

大正年代に東豊田踏切から野田、吉川を通り西豊田に至る道路が開かれ、南北方向では昭和5年（1930）に「渡津橋」が高洲～清須間に架けられ（1-6）、それまで‘渡し舟’で往来していた不便さが解消されるとともに、東豊田から野田・三ツ相・馬見塚を通過して渡津橋に至る道路や、菰口・吉田方小学校・吉川・高洲を通過して渡津橋に至る道路も建設された。また、西豊田から牟呂に至る道路も拡張され非常に交通の便がよくなった。さらに、高洲から富久橋を通過して吉前・五号に至る道路も開かれた。加えて、豊橋市の下水道の建設に併せて花田と野田を結ぶ南北の道路も建設された。これらの道路の建設は当校区の発展に大きな影響を与えた。



1-6 竣工当時の渡津橋（昭和5年）

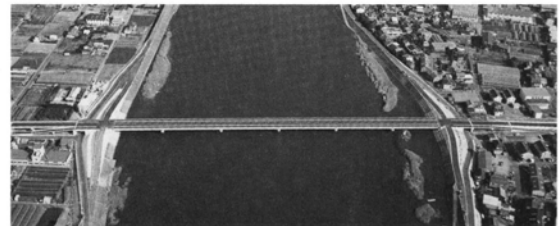
豊川本川の改修工事は、国の直轄事業として昭和13年（1938）に着手され、浚渫と<sup>しゅんせつ</sup>その土砂を利用した築堤工事が同時に進められた。しかし、途中で太平洋戦争により中断を余儀なくされ、本格的に改修工事が進められたのは、豊川改修の基幹となる豊川放水路が昭和40年（1965）に完成してからである。

吉田大橋より下流部の川幅の狭い所は、昭和44年（1969）から用地買収が開始され、特

殊堤により築堤、護岸、根固め等が施工され、昭和62年（1987）をもって現在の状態となった。この特殊堤の建設により堤防上が自動車道として利用できるようになった。

昭和38年（1963）の渡津橋の架け替え工事と共に、高洲町から新栄町・菰口町を通る国道23号線が建設された。この道路は新栄町から西へ市道として延長され、現在では卸団地を通過して豊橋総合スポーツ公園に至っている。さらに、有料道路の豊川橋が架橋されると同時に国道23号線豊橋バイパスが吉前町・五号（神野新田町）に建設された。

平成14年（2002）、豊川の三ツ相町～川崎町間に「上渡津橋」が架橋されると同時に石巻赤根線の一部が三ツ相町～新栄町間に開通し（1-7）、自動車の流れが大きく変化した。



1-7 完成直後の上渡津橋（平成14年）

## (2) 公共交通機関

吉田方校区内を走る公共交通機関はバス路線のみである。前芝線は昭和10年（1935）に開通し、蒲郡線と接続された。この路線は当校区と豊橋駅とを結ぶ重要な路線であったが、最近マイカーの普及に伴い見る影もなく衰退している。また、吉前線は昭和10年に開通し、戦後もなく吉前に海水浴場が再開されると夏季は大変な混雑ぶりであった。しかし今はこの路線は卸団地線となり、主に小学生の通学に利用されている。

現在、利用者の多いのは豊橋市民病院線で、市民病院通院者とスポーツ公園利用者及び豊橋西高校生の登下校によく利用されている。

## 第2章 歴史と生活

### 1 吉田方校区のあゆみ

#### (1) 500年前までの吉田方

志香須賀の渡し 私たちの校区吉田方は平安時代の中頃までは、豊川河口に広がる入り江の中であった。そして豊川によって運ばれてくる土砂が堆積して出来た中州が、あちこちに島を形成していた。

この入り江を挟んで、東海道という重要な道路があり、旅をする人はこの入り江を船で渡らなければならなかった。

承和2年(835)に出された太政官符は、この川を飽海川と呼び、これまで2艘の船で渡していたが、それを4艘に増やすということを示している。その頃、豊川は豊橋付近では飽海川と呼ばれていたようである。渡しの北岸は渡津駅、今の小坂井・篠東付近であった。今も船の発着点だったとされる地に柏木浜と刻んだ石碑がたっている。南岸は羽田の城海津からお茶屋坂、牟呂の坂津付近にかけての1帯であった。兩岸の間はおよそ4kmで東海道の中では指折りの渡しであった(第1章1-2図参照)。



2-1A 柏木浜の碑



2-1B 牟呂坂津付近

時代が下って10世紀に入ると、この渡しは「志香須賀(しかすが)の渡し」と呼ばれるようになり、中央にまで知られる渡しとなった。清少納言の書いた『枕の草子』にも「渡しは、しかすがの渡」と出てくる。

渡しを通る旅人も増えて、旅の歌や日記に詠まれることも多くなった。有名になった歌を少し挙げてみよう。

中務集「しかすがのわたり」

・ゆけばありゆかねばくるししかすがのわたりにきてぞ思ひわづらふ(956年頃)

源兼澄「しかすがのわたりの夏」

・思ひたち急ぎこしかどしかすがの渡りに来てぞいもは恋しき(973年頃)

寂れた志香須賀の渡し 平安時代の末頃になると、ここを渡る旅人は次第に減っていったらしい。それを裏書するような歌が見られるようになる。

俊成卿女

・みし人の影ばかりこそしかすがの渡し絶えにし昔なりけり(1200年頃)

宮内卿家隆朝臣

・これもまた稀なる中はしかすがの渡しさへこそ移ろひにけれ(1200年頃)

記録をみると、この頃から上流の豊川(とよがわ)を渡る旅人が多くなったことがわかる。先にも述べたように志香須賀の渡しはおよそ4kmを渡らなければならない。平安時代の末頃から源氏平家の争いが激しくなり、かなりの軍勢が東西の主要道路を往復するようになった。戦には一刻も速く大部隊が川を渡る必要がある。4kmの志香須賀の渡しで

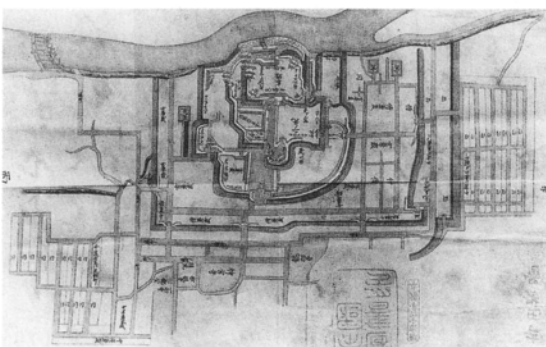
は時間がかかりすぎる。したがって渡河の地点として豊川宿付近の豊川上流が選ばれ、それにつれて一般の旅人もそちらに移っていったのであろう。

**渡津の今道** 1200年代の半ば頃になると「渡津の今道」という道が出来て旅人はもっぱらその道を通るようになったことが当時の旅行記などに書かれている。「今道」とは「新しい道」と言う意味で、このような道が出来たのは、小坂井あたりから下五井、瓜郷、下地へと結ぶ寄州や中州の堆積が進んで、平坦な陸続きとなり、歩行がたやすくなったためと考えられる。

志香須賀の渡しのあたりもさらに砂州が発達して南端の本流のほかには、二、三の細流だけが残り、あとは平坦な陸続きとなって大きな渡しの必要がなくなっていった。

**今橋の架橋** 渡津の今道が発達するにはもう一つきっかけがあった。すなわち豊川の架橋である。当時の紀行文などから推量すると、1200年代後半には現在の関屋と下地との間あたりに橋が架けられていたようである。この架橋によって、渡津の今道は急速に東海道的主要道路らしい発展をみせるようになった。吉田方辺もさらに中州が発達し、開発が急速に進んでいったようである。

**吉田方に馬見塚村が誕生** 今から500年前、永正2年(1505)、今川氏親の指示を受けて牧野古白が今橋城を築いた。当時、西三河で勢力



2-2 今橋城跡に建てられた三州吉田城図

を伸ばしてきた松平氏に備えたものであった。

今橋城が築かれた所は、現在の豊川と朝倉川との合流地点に臨んだ所にある鉄櫓(くろがねやぐら)の東側のあたりで(2-2)、そこに本丸があったといわれている。そのあたりは、馬見塚(まみづか)と呼ばれ、渡辺平内次という土着の武士の屋敷や、浄業院と村の鎮守の天王社があった。

築城に際し、渡辺平内次は今川氏親の命を受け吉田方の三ツ相村地先に移住して、馬見塚をそのまま地名とした。これが吉田方の馬見塚村の始まりであった。このときの平内次の協力に対して、今川氏親から次のような感状が贈られたと伝えられている(『今橋物語』)。

其方馬見塚為替地於渥美郡三相村本銭百廿貫文永々宛行之畢 於当家於令忠節益可加扶所依如件

永正二年十一月

今川氏親判

渡辺平内次殿



2-3 専願寺にある渡辺家の墓

平内次が移住した所は、氏親の感状による渥美郡三相村地先だったが、現在の川崎町の地であったかどうかよくわからない。

ところで、平内次が替地として与えられた土地はどのくらいの広さだったのだろうか。氏親の感状には、本銭百廿貫文とあるので、これに匹敵する土地の面積を推定すると、一貫文あたり千坪として、約120,000坪、つまり40haということになる。当時は豊川本流



が北島あたりから大きく日色野方面に蛇行して、馬見塚の地は川の南岸にあった。平内次は、ここを拠点として農業生産を高めていった。

## (2) 江戸時代の吉田方

**「吉田方」という地名** 私たちの校区名「よしだがた」が歴史の上に初めて登場するのは、天正7年(1579)の「酒井忠次 新田開発免状」(参州古文書)であるという。これは、吉田方新田の百姓による開発を許すことを認めた書状であるが、「吉田方」の地名は、野田・三ツ相・馬見塚のあたりを総称したものと思われる。

寛永15年(1638)、吉田方は馬見塚村・野田村・羽田村に分かれ、正保2年(1645)、馬見塚村から三ツ相村・吉川村が分かれた。五か村に分かれて後も「吉田方」は地域の総称として残り、「吉田方五か村」と呼ばれ、渥美郡吉田方村と区画されていた。

### 吉田方村々の起こり

**野田村** 野田村の草分けは孫四、太郎右エ門の二人であるといわれ、同町の氏神、素盞鳴神社は孫四の宮とも呼ばれていた。棟札によると、孫四とは中村孫四郎、太郎右エ門とは中村太郎右エ門である。

寛永15年5月2日に馬見塚村から野田村が分かれ、あらたに庄屋をおくことになったという。

野田村は昔「どう切れ」と呼ばれていた。豊川の洪水や台風時の高潮などでしばしばこの辺りの堤防が切れたからである。寛永13年(1636)に津波に襲われ、その修復に際して水野隼人正の家老三輪長左エ門が検分に来たとき「どう切れ」は不吉な呼び名だからと、水野の野をとって野田と名づけたという。吉田藩領で、村高は703石余であった。

**三ツ相村** 三ツ相村は正保2年(1645)馬見塚村から分かれて成立したという。しかし、

永正2年11月(1505)の渡辺平内次に対する今川氏親の感状によると「馬見塚」の替地として「三相村」本銭120貫文を渡辺平内次に宛がったことになっている。これによると、三ツ相村は少なくとも永正2年以前から集落として在ったということになる。

吉田藩領で村高は216石余。海方運上米が課せられ、吉田大橋の架け替え、修理の際に臨時に助船役を勤めた。後、安政4年には三ツ相の渡しが開設され、渡船1艘が置かれていたという。安政5年(1858)の家数59、人数303であった。

**吉川村** 吉川村は寛永3年(1626)、大林六郎左エ門清長が葭原を開拓して居住したのが始まりといわれる。正保2年(1645)に馬見塚村から分かれて独立した。吉田大橋の架け替え、修理の際、臨時の助船役を課せられたこともあった。村高297石、安政5年の家数36、人数165であった。

**菰口** 菰口は、もともと野田村の内にあったとみられ、その開発は定かではないが、神社の勧請は天文元年(1532)となっているという。開発人は山本弥三左エ門・杉浦与次兵衛と、おつまという女性の3人と伝えられている。

明治9年(1876)東豊田村の一部となり、昭和7年以降、豊橋市菰口町となった。

**新栄** もと野田新田と呼ばれ野田村に属していた。その開発は天正7年(1579)、朝倉七右エ門が始めたと伝えられている。七右エ門は三河十七騎の一人であった。

明治9年(1876)西豊田村の一部となり、昭和7年以降豊橋市新栄町となった。

**新田開発で生まれた集落** 江戸時代に入ると吉田方では新田開発がめざましく進展した。1600年代に集中したこの新田開発は全国にさきがけたものだったといわれている。

開発が促進された背景には、まず豊川河口

の中州が発達したことがあげられる。すでに前項でものべたように、1200年代から中州の発達がいちじるしく、渡津の今道が開かれるなどの陸地化がめだってきたのである。

全国的に諸藩の奨励などから新田開発が最盛期を迎えるのは享保の頃（1716～1736）であったとされているが、吉田方はそれより半世紀ほど早くから開発が進んでいた。

**高須・土倉新田** この新田は寛文5年(1665)、吉田本町の高須久太夫、高須嘉兵衛、上伝馬町の真弓佐平、豊川村の高須十太夫、摂州（大阪府）池田出身で吉田に住んでいた土倉五郎兵衛の五人によって河口の左岸が開発されたものである。

しかし、たびたびの台風や地震などの災害を受け、新田は海底に没してしまった。5人の元締の資力では堤防の復旧が至難となったが、農民たちは必死になって潮止めの堤を築き新田を守り通した。

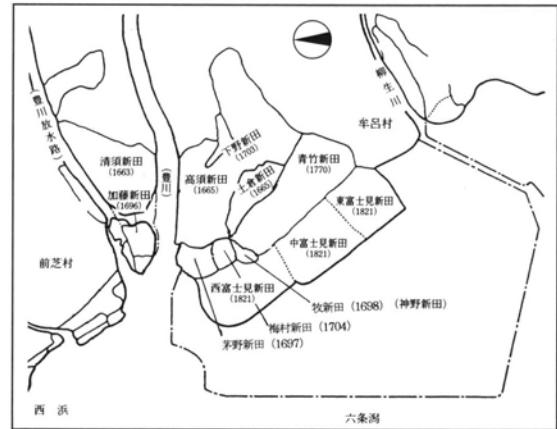
その後、元締めは浜松から移ってきた御用達の植田喜右衛門が受け継いだ。安政年間に碧海郡川嶋村の太田佐兵衛に譲り渡され、明治7年（1874）、小作人に譲渡された。

**茅野新田** 元禄10年（1697）高須新田の地先に前芝村と梅藪村の村請負で開発された。明治7年、下野新田・土倉新田を合併し明治11年に、青野村の一部となった。

**牧新田** 茅野新田と青竹新田の地先を開発した新田で、開発者牧野伝蔵の名をとって命名された新田である。元禄11年（1698）に成立した。

**下野新田** 元禄16年（1703）に、野田村の弥惣左衛門と下五井村の権左衛門が馬見塚村の東堀川を開発整備した新田で、下五井の下と野田村の野をとって下野新田と呼ぶようになった。

**梅村新田** 宝永元年（1704）に、額田郡萱園村の梅村権四郎が開発したと伝えられている



2-4 吉田方新田開発の図

が、詳細は分からない。

**青竹新田** 豊川河口付近は寛文年間にほとんど開発されたが、その後、数十年間に再び干潟が成長して、明和7年（1770）、高須新田と土倉新田の地先に新田が開発された。開発者は前芝村の青木九郎治と吉田呉服町の大嶽七右衛門であったので青木の青と大嶽の嶽（竹）をとって青竹新田と呼ばれた。明治11年（1878）青野村の一部となった。

**富久縞新田** 吉田藩勘定方の福島献吉は文政3年（1820）牟呂沖新開惣奉行に任命されると、ただちに藩営業の富士見新田開発に乗り出した。彼は、豊川河口左岸の茅野新田・梅村新田・牧新田・青竹新田を経て牟呂村にわたる地先の海岸約150町歩（150ha）を干拓し、これを二つの川（二十間川・五十間川）により西・中・東に分けた。そのうち、東と西の二区は田畑として、中の場は塩田としてそこで生産される塩の売上によって開発に要する費用を調達しようとした。しかし、計画どおりには運ばず、やがて新田と塩浜は吉田藩の手を離れ、民間の手に渡ってしまった。その後、富士見新田は台風と高波で堤防が壊れ一時荒廃したが、弘化4年（1847）、修築して富久縞新田と改められた。明治9年（1876）に青野村の一部、昭和7年以降富久縞町となった。

**吉田方村々の石高** これまで述べてきたよう

に吉田方の村々の多くは、1500年代に生まれているが、それぞれの村の米の生産高はどのようであったのだろうか。羽田八幡宮の宮司だった羽田野敬雄の書いた『吉田方郷羽田村綜録』には、つぎのように吉田方村々の石高や惣高が記録されている。

羽田村 高九百八十二石一斗二合  
 野田村 高六百八十九石五斗五升一合  
 吉川村 高二百九十七石四斗四升七合  
 三相村 高二百十六石九斗六升二合  
 馬見塚村 高四百五十一石三斗九升一合  
 合五ヶ村高二千六百三十七石四斗五升三合  
 吉田町地 高五百七十石九斗四合  
 高須新田 高九百五十一石八斗二升一合  
 土倉新田 高二百五十三石一斗五升八合  
 下野新田 高四十五石三斗八升  
 青竹新田 高百七十三石一斗三升  
 惣合 四千七百五十七石九升  
 富士見新田ノ内  
 ・吉尾曲輪 高九十七石二斗二升七合  
 ・同 中富士見 高百五十三石五斗六升二合  
 ・同 富久縞 高二百二十石二升四合  
 三口合 四百七十石九斗九升三合  
 惣合 五千百七十六石七斗八升三合

年月日ははっきりしないが、文政2年(1819)以前と思われる。



2-5 渡辺家築山にある平内治翁の碑

馬見塚村の渡辺平内次家(庄屋)と農民の暮らし ここで、馬見塚村の庄屋、渡辺平内次家の暮らしを例にしてその頃の農民の暮らしを探してみよう。

宝永2年(1705)の馬見塚村の戸数は63戸だった。21戸は

田畑を所有する本百姓で、42戸は田畑を持たない貧しい百姓であった。渡辺家は、村の中で一番大きな農家で12 haあまりの田畑を持っていた。家族が11人、使用人が48人という大家族だった。平内次は、家族と力を合わせ使用人を使って、米をはじめ麦・大豆・野菜などを作っていた。年貢を収めたあとの農産物は自分の家で消費したり、売ってお金に替えた。

売ったものは主に米で、ほかに、蜜柑・筍・大豆・麦・胡麻・藍・なす・うり・からし・蕎麦などだった。反対に買い入れていた物は、ほしか・農具や馬具・作物の種・魚・鳥・貝・調味料・衣料品などである。

さて、馬見塚村農民の経営規模をみると、時代と共に高1石に満たない農家が増加していることが読み取れる(『豊橋市史第二巻、馬見塚村農家の経営規模』)。これらの貧しい農家は、大地主の土地を小作したり、町に奉公に出たり、賃金労働をして生計を立てなければならなかった。

**豊川本流が変わる** 豊川は大きな洪水ではしばしば流れが変わった。文禄3年(1594)の大洪水の際は、流れが馬見塚の地を南北に二分するようになり、この時から平内次の屋敷は川の北側になってしまったようである。

ところで、高須土倉新田・加藤新田等が開かれてから悪水排出のための工事がいろいろ行なわれてきたが、天和2年(1682)、豊川の水はけが悪くなったので、馬見塚と三ツ相との間を通り、吉川の郷中から高須土倉の蜂ヶ尻、江川通りへかけて掘割を造った。しかし、なお水はけが悪かったので城主に願って、高須新田と加藤新田との間を川幅4間に掘り割った。後、この掘割は水量の増加と共に次第に幅を広げ、20間、30間となり、ついに豊川の本流となった。したがって、これまでの豊川の流路は河口へ直行するように

大きく変わり、吉田方の馬見塚村は豊川本流によって右岸方と左岸方とに分かれてしまった。本流の北側になった馬見塚村はいつからか川崎村（左岸の馬見塚村から見て対岸の意か）と呼ばれるようになった。

**江戸時代の灌漑用水** 吉田方の村々の主要農産物は米で、吉田の産米の大半は吉田方の農家が作っていた。その米作りに欠かせない灌漑用水はどのようにして確保していたのであろうか。

資料がないので推量に頼らなければならないが、おそらく血のにじむような努力が払われたにちがいない。

**大池の水を使ったことも** 吉田方のどの地域かわからないが、城の外濠に向山大池の水を引き入れ、その余水を城郭の西南から吉田方方面に流下させていたようで、濠の水の出口を示した絵図があった。しかしこの水がどのように利用されていたかはわからない(2-2図)。

**早魃に豊川の水を引く** 高須村土倉市平家の記録に、早魃のとき高須新田では、豊川を堰き止め、田へ水を引き入れたという事が記されている。

嘉永5年(1852)4月末より雨が少なく、5月(旧暦)の田植え時になっても、田は乾ききって、まるで畑のようだった。小作の百姓たちは、槌で土塊を砕き、杭で穴をあけ、その穴へ苗を植え込んだ。しかし、早魃はますますつのるばかり。そこで、小作人一同は元締め植田七三郎の計らいで、それぞれの地主や作人と協議し、馬見塚村・吉川村とも相談が調い、公儀へ出願することになった。その内容は、豊川の本流を堰き止め、堤を切り割って水を引き入れるという未曾有の大工事計画だった。

藩の許可が出ると早速水引き入れの工事を始める事になった。6月初め、小潮の時を期して馬見塚専求庵(今の専願寺)西高宮裏よ

り川崎の天神山を見通して杭木を立て、高さ9尺ほどの堰堤を川中に築き、中央に「たがい口」と称する水の溢れ口を作り堰堤が破れないようにした。一方、堤防の切り割りも行ない、6月9日にはすべての導水路が出来上がった。

こうして、豊川の水は一日一夜にして馬見塚、吉川より小向野まで行き渡り、2日目より3日目にかけて高須をはじめ、広野全部の灌漑が終わった。その結果は予想以上に良いもので、農民一同の喜びは一方ならぬものだった。4日目には堤を留めきり、堰堤を取り除いた。

この工事中、公儀よりは奉行・同心が毎日出張、専求庵の裏の堤防上に幕を打ち回して日夜詰め通したという。

工事には吉田方は言うに及ばず、牟呂・草間・前芝・梅藪・川崎等の多くの農民があたり、毎日、昼夜交代で三百人余りが動員された。

工事の結果、水田はいうに及ばず、畑作まで蘇生し、七八分作の実りを得たという。まさに藩をあげての緊急大事業だった。

この豊川堰堤止めは、翌年も高須新田が早魃のため二度目の実施を試み成功している。豊川本流を堰き止め水を引き入れ、水田の灌漑用水に使うというのは、ずいぶん大胆な企てであり、それだけに水の引き入れが農民にとって死活の問題であった事がうかがわれる。

### 主な自然災害

**宝永の大地震** 宝永4年(1707)10月4日昼ひつじの未の上刻(午後1時半頃)大地震が起きた。これによって、吉田町中、倒壊した家屋が多く、破損しなかった家は一軒もなく、家が潰れて7、8人死んだという。吉田方では高須土倉地区の堤防が決壊、潮水が流れ込んで田畑の作物皆無となり、古記によると、「米野、小水尾辺、二、三尺ほど大地が裂け黒い泥が吹き出し、人々は皆竹藪に入り、また、竹のすのこを作って其の上に居るようにした」と

いう。

震源地は東南海沖。マグニチュード8.4であった（豊橋市史二）。

**安政の大地震** 安政元年（1854）11月4日、朝五つ半（午前9時頃）、極めて強大な地震が襲った。

この、安政大地震における吉田方の被害状況が当時の「吉川村大林弥平太記」に記されている。引用（一部略）してみよう。

「十一月四日、朝五つ半極大地震、吉田方四十七軒倒壊、外の家は半ころび、吉田城半ころび、堤こわけ入り、高須新田、吉川村川田まで汐来る。吉川堤百二十間、幅三尺、天神西堤は二十三間、中地堤は二十間ものならず、およそ百日程は度々地震、あと六十日程は日照り、当所神明社ころびたり」とある。

また、高須の土倉家の伝える古記録によると、地元の高須あたりでは、けが人はなかったものの、揺れは宝永の地震よりも強かった。4日には1日22回も揺れた。翌日の朝、猛烈な地鳴りがして、今にも世界が滅亡するのではないかと恐れおののいた。老人の考案で竹のすのこを編み地に敷いて、其の上に筵・蓆などで小屋を作り、其の中で寝起きした。

大小の余震は止む事がなかったが、ようやく11月22日になって、まったく揺れなくなった。高須土倉、青竹一帯の人家は多く倒れ、半壊の家も柱など皆折れて危険だった。草葺の家は被害の程度が軽かったので、その後の家造りでは草葺のものが多くなった。

大地の裂けたところ大は3尺ぐらい、深さは10尺あまりもあった。1尺ぐらいの地裂は各所にあり2、3寸裂けたところはたくさんあった。田畑の損害は東田の面は軽く、西田の面が重く、地が碎けて潮水が浮き上がり（おそらく液状化現象だろう）作物が全滅になるところもあった。新田各地では堤が決壊して潮水が入るようになった所も

少なくなかった。

震源地は 遠州灘東部。マグニチュード8.4であった（豊橋市史二）。

**台風・大雨の被害** 豊川沿い、海岸沿いの村々が多い吉田方では、昔から大きな風水害を蒙ることが多かった。江戸時代の記録に残る主なものをあげてみよう。

- ・延宝8年（1680）8月6日、彼岸の中日（旧暦）、南風強く戊亥（北西）の大風で高須・土倉新田に津波（高潮）が流入。床上5、6尺家財・諸道具流出。
- ・宝永2年（1705）6月27日、晩より大雨。夜中大風雨。明けて28日昼から大水、大橋下より高須川通りの堤に水が乗り、高須村堤が大分破損し、作物がほぼ全滅となった。
- ・正徳元年（1711）8月23日、夜亥の刻（午後10時）に大風が吹き荒れ、高須へ津波が打ち入り、村中の家が流れ、堤も大分破損した。高須で3人死亡。  
馬見塚神明社より牟呂坂津下まで2,168間の堤が築かれていたが、内335間を残して、深い切れ口162間、半切れ19間、堤の上少し切れ1,652間、といった具合で、ほとんどが破損してしまった。
- ・正徳2年（1712）8月18日、夜戌の刻（午後8時）より東風強く、夜中次第に富士嵐の風強く明けて19日辰の中刻（午前8時）、高須へ津波が打ち寄せ、堤切れ口25箇所、間数306間。蜂ヶ尻・下野の堤が、大いに切れる。
- ・正徳4年（1714）7月8日～9日、大風雨で百年来の大水となる。大橋下より専求庵宮山まで5箇所切れ、大水が高須村へ入る。高須堤ほか各堤123間ほどが切れて、大津波が打ち入り、秋作全滅というありさまであった。
- ・享保3年（1718）9月12日津波高須に上がる。高さ6尺。

- ・享保20年（1735）6月22日、大川大水で北島の堤が切れ、吉田方一帯、高須に水入り、田畑は皆滅する。
- ・宝暦9年（1759）6月23日、洪水で船町の堤が切れ、吉田方一帯、高須へ水が入る。
- ・寛政4年（1792）7月13日、大風雨。船町堤切れ、吉田方満水。高須は水の深さ4尺5寸に達した。
- ・寛政6年（1794）8月3日、夜中より大雨、船町の堤が切れ、吉田方一帯満水となる。
- ・文化5年（1808）7月25日、大風南に回り直ちに西返し、高潮が広野へ入る。
- ・文化12年（1815）6月25日～26日。吉田方、高須これまでにない野水が入る。

以上のように土倉家の記録によると、川沿い、海沿いの吉田方は台風・大雨が襲うたびに大きな被害を蒙っていた。災害の後の修復事業もまた大変なものだった。しかし、住民はたたかかれても、たたかかれても屈することなく堤防を造り直し、築き立てて、新たな風水害に備えたのである。

### (3) 明治～大正の吉田方

**明治維新と新しい世の中** 慶応3年（1867）12月徳川幕府が倒れ、同4年（1868）3月、五箇条の御誓文が出され、7月には江戸が東京となり、続いて、9月には元号が明治に改められた。新政府は版籍奉還や廃藩置県を進め、封建制度を廃止していった。府県の統廃合も矢つぎ早に行なわれた。

吉田の地名も新政府のもとで豊橋と改められ、版籍奉還にともない、旧藩主の大河内信古が豊橋藩知事に任命された。

**行政区の移り変わり** わが吉田方も新政策の廃藩置県により、豊橋藩から豊橋県、さらに額田県、最後に明治5年、愛知県へと所属の県名がめまぐるしく変わった。愛知県の行政機構の整備にともなって、吉田方

は愛知県第十五大区渥美郡に所属することになった。以降も暫らくはめまぐるしく行政区画が変わっていった。主な変化だけでもつぎのようである。

明治5年（1872）愛知県第十五大区（渥美郡）  
明治11年（1878）7月 郡区町村編成法制定。

12月より施行。郡役所で事務掌管。  
明治11年12月23日 馬見塚村・三ツ相村・吉川村・野田村・高須新田村が合併して渥美郡豊田村となる。

明治15年（1882）6月19日 豊田村が東豊田村と西豊田村とに分かれる。

明治22年（1889）10月1日 東西の豊田村と青野村とが合併して吉田方村となる。

明治39年（1906）7月4日 吉田方村と牟呂村とが合併して渥美郡牟呂吉田村となる。

明治39年8月1日 市制施行 豊橋市誕生。

昭和7年（1932）9月1日 渥美郡牟呂吉田村は、他の町村とともに豊橋市と合併した。

**渥美郡吉田方村吉田方尋常小学校創立** 明治25年（1892）4月新小学校令による学校教育が発足。先行する吉田方地内の初等教育機関がここに統一されて、より充実した教育が推進されるようになった。

小学校はこののち明治28年（1895）に高等科が設置され、校名も渥美郡吉田方村吉田方尋常高等小学校と改名された。



2-6 吉田方尋常高等小学校の玄関（昭和7年頃）

**豊橋市吉田方尋常高等小学校の発足** 昭和7年（1932）、豊橋市に合併することに伴い学校管理も豊橋市に移管し新しい校名のもとに、校区の教育がスタートした（2-6）。

**新しい制度と暮らしの変化** 明治になって人々の暮らしに大きな変化をもたらしたのは自由民権思想の普及と高まりであった。明治22年（1889）に大日本帝国憲法が公布され、翌年の7月には第1回衆議院議員総選挙が行なわれ、11月には第1回帝国議会が開かれた。これ以後近代国家の建設に向けて様々な取り組みが始まり、国民の生活も大きく変化した。

**豊橋市制の施行と大口市長** 豊橋市制施行後の明治40年（1907）1月、大口喜六が初代の豊橋市長となった。大口市政の発展策として実現していったものの主なものは次のようである。

- ・明治40年（1907）高師村に第15師団の設置。
- ・明治43年（1910）より、新道路の開設や改修を進めた。
- ・明治44年（1911）より豊橋駅の機能向上、模様替え。

**経済産業の発展と吉田方** 歩兵第18連隊や第15師団の設置で軍都の色合いが濃くなるとともに、東海道線豊橋駅の発展、道路網の発達などの影響で豊橋の経済や産業に目覚ましい変化がもたらされた。

豊橋駅に比較的に近いということを利用したのであろうか、吉田方の藤城六十吉ら2、3人が豊橋駅の前に2間程度の掘建小屋を建て、駐車場の貨物を扱う運送業を営んだことが『とよはしの歴史』に記されている。

**文明・文化の進展** 暮らしに変化をもたらしたものは他にもたくさんあった。おもなものをあげてみる。

- ・豊川鉄道の開通
- ・豊橋電灯株式会社設立と配電開始
- ・豊橋郵便局の開設

- ・第八銀行の設立
- ・初等中等教育の進展
- ・文化活動（演劇・文学—小説・短歌・俳諧漢詩文・美術）の発展



2-7 明治41年に複線化された東海道線の豊川橋梁

### 新田の開発

**吉前新田の開発** 明治になってからも江戸時代に継いで新田の開発が進められた。まず吉前新田の開発である。開発に取り組んだのは、浅野喜七郎・青木重五郎・青木平太郎・青木和市・伊庭喜一・磯村永助・小柳津次郎右衛門・宅間菊太郎・中村兼四郎・西土文八・藤井平三・吉原祐太郎などであった。

明治25年（1892）2月4日に開発願いを出し、翌26年2月7日認可、直ちに着工して27年12月17日には竣工した。地元の人たちが多数工事人夫として働き、人海作戦で工事は進捗した。働いた人たちの中には賃金の代わりに、干拓で出来た土地を受け取った人もいたという。

**神野新田の開発** 豊橋市内でいちばん大きな穀倉地帯である神野新田は、明治になってからの開発であった。明治22年（1889）旧山口藩の毛利祥久が干拓した毛利新田は、潮どめ直後に津波で堤防が切れてしまったため、再び工事を行なって翌23年5月に完成した。

その後明治24年（1891）の濃尾大地震や翌年秋の大暴風雨で堤防は完全に破壊されてしまった。そこで祥久は開発した新田を41,000円で神野金之助に売り渡した。金之助は直ちに復興に着手した。破壊された堤防を元の位

置に改めて築きなおし、高さを前よりも6尺(約1.8m)高くして4間(約7.2m)とし、工事担当責任者である服部長七が考案した人造石を使って大堤防を築きなおした。堤防内の地ならし、埋め立て、用水工事、地割りなども、1日平均5,000人の人夫を使って進めたが、なかなかの難工事であった。こうして、堤防の長さ約12km、総面積1,100haにおよぶ神野新田は明治26年(1893)に潮止めに成功、同29年(1896)に完工した。

**天皇陛下・皇后陛下の御真影奉戴** 大正4年(1915)10月28日、吉田方尋常高等小学校へ天皇陛下の御真影が下賜されることになった。当日は村をあげて御真影を奉迎、厳粛な奉戴式が行なわれた。

翌年、皇后陛下の御真影も同様に奉迎、奉戴式が行なわれた。

#### (4) 昭和(終戦まで)の吉田方

**豊橋市野田処理場が完成** 昭和6年(1931)野田町と三ツ相町の間で堤防に接して豊橋市の下水処理場が建設される事になった。計画が発表されると地元から強い反対運動が起こった。汚水の処理で豊川の水が汚れるという事で三ツ相町が先導し、野田町や耕地整理組合などにも協力を呼びかけて、反対運動を始めたが、実らず、工事着工となった。工事は大掛かりなもので5ヵ年かかったが昭和10年(1935)8月に完成した。



2-8 現在の豊橋市野田処理場

この施設は、当時最新の「機械攪拌式シンプレックス方式」を採り入れたもの(豊橋市は東京、名古屋、京都に次ぎ全国で4番目)で、他の方式を含め全国でも6番目の本格的な汚水処理場であった。

処理水は一部灌漑用として、周辺の水田に利用された。

**三ツ相町の古老の話** 反対運動に対しては、吉川町の市議会議員、大林和助氏が市長の意志を汲んで地元の説得に当たった。化学的に処理し金魚や鯉が飼える程綺麗にして豊川に出すのだから絶対に心配はないということで、代表者が先進地、名古屋の熱田区と中村区の処理場を参観したが、とても魚が飼えるようなものではなかった。

その上、汲み取った糞尿も持ち込むとなれば臭くて鼻持ちならぬからと市長に陳情したら、「そんな遅れた考えでどうする」と叱られたそうだ。そして「今度豊橋に作るのは最新式のものだから心配はない」と言われ、それを信じて承知する事になったが、代りに処理後の水の一部を灌漑用に使わせてもらうことにした。

**戦時下の暮らし** 昭和12年(1937)7月7日、中国の蘆溝橋で日本軍と中国軍が衝突、これがきっかけで日中戦争が始まった。戦火は次第に拡大し、やがて昭和16年(1941)12月8日、日本は対米英宣戦布告、太平洋戦争に突入することになった。

国民の生活は日増しに緊迫の度を増し不安と欠乏の日々を送ることとなった。校区からも召集を受け一家の中堅となる男の人たちが大勢出征していった。昭和19年には学徒勤労動員実施要綱が施行され学生や13歳以上の生徒・児童まで工場などで働くことになった。吉田方小学校(当時は吉田方国民学校)に



は軍の一部が駐屯し、運動場は打ち起こされて、さつまいもが作られた。また、不足する蛋白源の補充としてイナゴ取りなども奨励された。一方、人手不足を補うために、児童も高学年は農作業などに駆り出されることになった。

豊川にかかる鉄道の豊川橋梁や幹線道路を渡す渡津橋には、守備のため、小学校や民家に駐屯する部隊から、兵隊が派遣されて警備を続けていた。専願寺の裏山の藪の中には警備の兵隊が作った防空壕の残骸が今も残っている。

**豊橋空襲と吉田方** 昭和20年(1945)6月19日夜半から翌20日の未明にかけて豊橋市はアメリカ空軍B29爆撃機136機による焼夷弾攻撃を受け、一夜のうちに焦土となってしまった。吉田方は直接の目標地域ではなかったが、死者2名、小学校の焼失、その他校区内諸所で家屋焼失という被害を受けた。しかし校区民の努力で復旧は速かった。

目撃者古老の談。死者2名は姉14歳、弟13歳の姉弟だった。防空壕の中において、壕が焼夷弾の直撃を受け、いたい、いたいと泣き叫んでいたが医師の手当てを受けることもできないままに間もなく死んでしまった。まことに痛ましいことだった。

**平和の礎となった人々** 昭和12年(1937)7月7日に始まった日中戦争から、同16年12月8日開戦となった太平洋戦争では、吉田方校区においても多数の方々が戦死・戦病死されている。亡くなった場所も、太平洋の島々をはじめ、中国大陸・フィリピン・ビルマ・オーストラリア・ロシアと広い範囲にわたっていた。また、国内では豊川海軍工廠が空爆を受け、学徒動員で働いていた旧制の中等学校や女学校の生徒も亡くなっている。

## (5) 戦後の吉田方

**農地改革** 昭和21年(1946)2月、第一次の農地改革が施行された。これは、連合国軍総司令部(GHQ)の指導のもとに、小作制度を廃止して、自作農を作り出すことを目的とするものであった。豊橋市で改革の先陣を切ったのは、270戸余りの小作農を擁する五号地区を含む神野新田地域であった。

地主の神野新田株式会社は直ちに国の方針に応じ、所有農地約650haを小作農に解放することにした。そこで、解放条件について、県の指導のもとに関係者間で協議が行なわれ、原則として1戸当りの農地を2haとし、それ以上の農地は規模の小さい農家に割り振ることなどが決められた。売渡価格は10a当たり平均785円(昭和20年米価1円/kg)とし、昭和22年(1947)5月8日、契約の本調印が行なわれた。

神野新田町の改革は全国的にもきわめて稀なもので、一般的には地主による小作地の取り上げが大々的に行なわれ、第一次改革は遅々として進まなかった。そこで国は昭和21年(1946)8月、改革を強力かつ徹底的に行なうために、第2次農地改革を実施した。

その内容は、①不在地主の農地は全て買上げる ②在村地主の農地の保有限度は、自作地2.2ha、小作地0.7haとする ③売買には国が関与する ④地主への代金支払いは一部現金(4,000円まで)、それ以上は30年賦償還 ⑤最高小作料を決める ⑥売買価格は10a当たり平均、田757.6円、畑449.98円、という厳しいものであった。

この大きな改革施行に当たって、市には農地委員会が設けられ、委員は農村の隅々にまで入り込んで徹底的な掘り起こしを行なった。この間地主と小作農との利害が対立する関係にあったが、関係者の努力をはじめ、敗戦による国土の荒廃と民意の喪失およびGHQの

命令ということもあって、昭和25年（1950）3月までに全て完了した。この結果、自作農は大幅に増加し、小作農は3分の1に激減した。

**土地改良（耕地整理）** 農地の生産性をたかめ、農業経営の改善をはかるために行なわれた耕地整理は戦後、土地改良と呼ばれるようになった。これは、昭和24年（1949）6月6日に施行された土地改良法によるもので、事業の目的や内容は以前の耕地整理を継承発展させたものであった。

吉田方校区ではすでに戦前の、大正13年（1924）に野田地区・菰口地区にそれぞれ耕地整理組合が設立され、翌14年から両地区ともに整理事工が始められた。

これを皮切りとして、昭和3年（1928）には、吉田方耕地整理組合が結成され同年のうちに整理事業が開始された。この組合には吉川・馬見塚・三ツ相の村々が参加しており、同6年に組合設立、同9年に工事着工の新田（後の新栄町）をふくめると、これで吉田方校区内の大部分が整理事業に入ったのである。



2-9 耕地整理の現形図と確定図

以前の農道は荷車がやっと通れるほどの狭さ、それも数が少なく、肥料などの搬入や作物の搬出はほとんど天秤棒で担うか、肩担ぎであった。耕地整理では道幅を1.5間（2.7m）以上に、幹線道路は3間（5.4m）以上に拡幅した。

そのほか、整理事業の眼目として次のことがあげられる。

・灌漑の利便を図る

用水路は牟呂用水（三村用水）を主要水源として、有効に利用できるように用水路、排水路の整備を行なった。

・耕地の区画整理

道路や、用排水路の敷設にからめて、各農地の区画を整理し農地の有効性を高めるようにした。

以上のような内容で工事は進められたが、昭和5年（1930）に工事が完了した野田地区を除いて、各地区の事業は戦時に入って遅れを余儀なくされ、菰口は昭和14年完了、吉川・馬見塚・三ツ相三村の整理事業が完了したのは戦後の昭和26年（1951）11月30日であった。

戦後の土地改良は昭和30年に、牟呂吉田土地改良区が設立され、第一工区（高洲）、第二工区（青竹）、第三工区（茅野・梅村）が工事に着手した。奥行き30間（54m）として、用水路と排水路が整備された。また、富久織地区は昭和40年に着工され、交換分合により土地の集約がはかられ、灌漑も以前は井戸水に頼っていたのが牟呂用水の導入利用や、ポンプアップにより大きく改良された。

これら土地改良（耕地整理）事業によって、農地の生産性は目覚ましい伸びを見せ、水稻の生産では平均反（10a）当り1俵（60kg）ほど増収となり、畑作では桑園に代って蔬菜や園芸作物の栽培が盛んになるなど農業経営の近代化を大きく促進させることになった。また、道路の開発や耕地の区画整理は後の都市計画事業の展開を容易にしたという面もあり、校区の発展にとってもきわめて重要な事業であった。

**進む都市化** 昭和30年代まで、吉田方校区は豊橋駅や市街地中心部に比較的近いにもかかわらず、他地区に比べて開発が遅れていた。いわゆる純農村地帯であり、東海道本線豊田踏切から吉田方小学校の北側を通り、高洲町

に至る幹線道路沿いの菰口町の東部にわずかな商店が軒を並べ、小規模な商店街を形成していた。

昭和44年(1969)に都市計画法が施行され、都市化を促進する市街化区域と、都市化を抑制して農業を守る市街化調整区域の線引きが行なわれることになった。吉田方でも町内ごとに、公民館などに関係農家が集まり、議論の末、所定の手続きを経て両区域が確定した。その結果、市街化区域は、新栄町・小向町・高洲町の集落以東で、それぞれ第1種住居地域と準工業地域とに用途区分された。一方、市街化調整区域は上に述べた以外の地域で積極的に農業投資を行ない、農業振興を図るための農用地域と、その他の区域(いわゆる白地)とに区分され、吉前町・問屋町の全部、富久縞町・青竹町および五号地区の集落部分を除き、すべて農用地域に指定された。この地域は県内でも稲作を中心とした有数の優良農業地帯を形成しており、近年、施設園芸も急速に発展している。

この線引きによって、一般的には開発が難しい市街化調整区域であるが、政策的な見地から、区域内に「豊橋総合卸センター(問屋町)・豊橋市総合スポーツ公園(神野新田町)・シーパレス(同前)・港湾技能研修センター(同前)・豊橋自動車検査登録事務所(同前)・豊橋市西部環境センター(同前)・県動物保護管理センター(同前)・豊橋市民病院(青竹町)・学校法人みゆき学園(高洲町)・豊橋温室園芸組合(高洲町)」などの施設が設けられた。

これらと前後して、校区内の国道23号線沿線などには昭和40年代から50年代にかけて各種商店、飲食店、自動車ディーラーなどが競うように出店開業し、市街化区域内には中小企業、個人住宅、マンションが建設され、バブル期とあいまって急速に都市化が進行した。さらに平成年代に入ってから、バブル

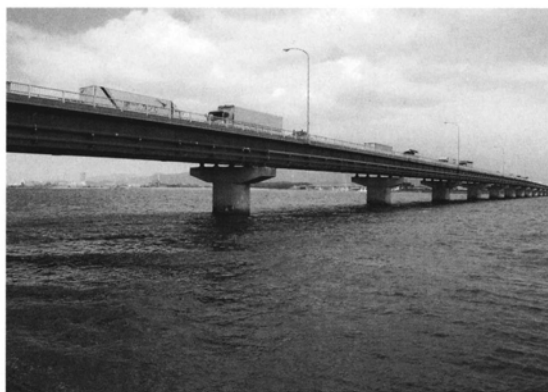
の崩壊により、中小企業が倒産して、その跡地に分譲住宅あるいは大型マンションが、また、いわゆる全国チェーン大店舗、コンビニが相次いで開店、都市化に拍車をかけている。**下水道事業の整備** 都市化の推進にとって、どうしても必要な事業は下水道の整備である。吉田方は、海拔1.2m~1.5mの沖積低地であり、都市化の進展にともなって、水田が減少し、そのため雨水の滞留する事が多くなった。とくに、昭和49年7月7日の豪雨のときには、吉田方校区内で床下浸水35戸、床上浸水22戸と大きな被害をうけた。

このような状況に対処して、第二次下水道拡張地域として、野田・菰口および三ツ相の一部が、さらに第四次下水道拡張地域に三ツ相の残り地区・新栄・吉川・馬見塚および高洲の一部が組み込まれ整備工事が進められた。これら工事の完工により、以後は大雨になっても浸水を心配せずに暮らせるようになった。

## (6) 新しい時代へ進む吉田方

### 幹線道路の豊川架橋

**豊川橋の架橋** 国道1号線のバイパスとして一般国道23号線の拡充強化は早くから日本道路公団によって構想計画されてきた。田原市へのトヨタ自動車の進出等もあって、その構想の具体化が急務となり、急増する交通量とそれに伴う交通渋滞を緩和するために豊川河



2-10 臨海地の動脈を結ぶ 豊川橋

口に架橋することになった。これが「豊川橋」である（2-10）。

延長649m、幅11.8m、構造は上流側片側に歩道付きというもので豊川架橋としては最長のものだった。完成開通は昭和58年（1983）2月17日。この大橋は有料の橋だったが平成17年9月30日より、管理が日本道路公団から国土交通省に移管され、このため無料で通行できるようになった。

**上渡津橋の架橋** 豊橋市多米町から豊橋市街地を環状に周回して宝飯郡、豊川市を貫き石巻町から再び多米町へと結ぶ道路、県道豊橋環状線（石巻赤根線）は20年以上も前から計画されていた。

この道路にかかわり校区内ではとくに豊川架橋に大きな関心と期待が寄せられていたが、平成14年に竣工、上渡津橋と命名され、同年の12月22日に開通した。幅員15.3m、延長305.8m両側歩道付の橋である。



2-11 上渡津橋渡り初め風景

この架橋によって渡津橋を通行する車の混雑が幾分緩和されるようになった。また、この路線に沿って、コンビニやドラッグストアなどが進出しており、新しい路線景観が作られつつある。

**小学校のマンモス化と中学校移転** 昭和40年（1965）を境に吉田方の人口は次のように急増の一途を辿ってきた。昭和40年7,245人（対前回伸率142.7%）・昭和45年7,996人（同伸

率110.4%）・昭和50年9,256人（同伸率115.8%）・昭和55年9,995人（同伸率108.0%）・昭和60年10,827人（同伸率108.8%）・平成2年11,355人（同伸率104.9%）・平成7年12,485人（同伸率110.0%）・平成12年13,905人（同伸率108.3%）

このような吉田方校区の人口の急増は小学校や中学校の児童、生徒数の急増をもたらし、とくに吉田方小学校は豊橋市内のマンモス小学校となってしまった。そこで、校区民や関係者の要望を受け市側も平成14年度より対策を検討、その結果、中学校を高洲町地内に移転し、跡地を小学校用地に統合してゆとりのある校舎校地の実現を図ることになった。

中学校用地は高洲町長弦に22,000㎡を確保、平成20年完工、開校を旨として建設工事が進められ、平成18年4月現在、造成工事が完了している。



2-12 造成工事が完了した建設用地

#### 吉田方校区内の主な公共施設

**豊橋市総合体育館** スポーツによせる市民の強い要望にこたえる施設として、平成元年5月2日、豊橋神野新田町字メノ割の地に豊橋総合体育館がオープンした。

敷地面積は32,000㎡、建物面積12,348㎡で、1階には第1競技場・第2競技場・卓球室・体力測定室・幼児体育館・スポーツサロン等があり、2階には観覧席（一般2,000席・身障者5席）をはじめ、研修室（120名）・第1会議室（100名）・第2会議室（60名）・喫茶・軽食室など多彩な施設があり、開館以来、各種

スポーツ大会・トレーニング・各種の会合などに幅広く利用されている。

**豊橋市民病院** 豊橋市民に親しまれ地域医療の核となる総合病院をめざして、豊橋市青竹町の地に建設が進められてきた新市民病院が平成8年5月4日に開設された。

敷地面積92,204㎡、建築床面積16,500㎡、延べ床面積55,361㎡、来院者用駐車場は870台を収容できる。

診療科目は内外科をはじめ、呼吸器科・消化器科・循環器科・小児科・産婦人科・眼科・皮膚科・精神科その他計26科を設け、病床数計910と、近隣に類のない収容力をもつ総合病院である。

この総合病院に寄せられる信頼は開院のときから強く、市外からの入来院者も多い。今後市民のニーズに応えるための、より質の高い医療供給体制の構築が期待されている。

**アクアリーナ豊橋** 平成17年度の初めから神野新田町の豊橋市総合体育館横の旧駐車場跡に、豊橋市によって進められてきた体育施設「アクアリーナ豊橋」（建築面積9,422㎡）は18年4月29日に完工式が行なわれ、5月1日にオープンした。この施設は、夏は屋内プールとして、冬は屋内スケート場として使われる複合施設で、広く市民に利用されることが期待されている。



2-13 屋内プール・アクアリーナ

## 2 吉田方の産業

### (1) 農業の変容

吉田方校区は豊川左岸の沖積層に広がる豊かな農村地帯であった。農家の経営は多角経営が主体で、稲作はもとより、畑作では豊橋の近郊野菜生産地として露地野菜の生産が盛んであった。

新栄町では果樹栽培もとり入れられ、蜜柑・梨などの栽培も行なわれた。明治中期には北島の先進的な農家により、温室園芸がとり入れられ、技術研究が進み現在の温室園芸の基礎が築かれた。明治後期には養蚕製糸業が興り、「生糸は第一輸出品」の国策に沿って養蚕が盛んとなり、吉田方西部の畑は一面の桑畑となったが、昭和初期の世界恐慌により、輸出は激減し、続く日中戦争、太平洋戦争による食糧不足から、桑畑はつぶされ、麦や甘藷が植え付けられた。

戦後農業の変容は著しいものがあり、農業機械化の進展、除草剤・化学肥料の普及により、農作業の省力化が進み、一方で、商工業の発展による就労機会の増加が著しく、国道23号線以東の都市化の進行とともに兼業農家を増加させた。

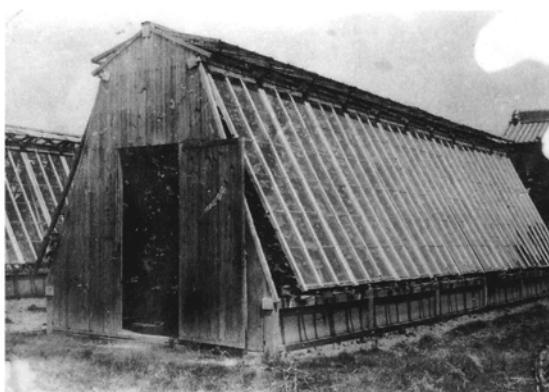
専業農家は選択的拡大を求められ、多数の兼業農家と一部の大規模専業農家との二極化が進行した。

**稲の早期栽培** 昭和28年9月25日に襲来した13号台風により、この地帯の稲作は壊滅的な被害を受けた。この教訓から試験場や普及所の指導で、台風被害を回避できるとされる早期栽培の実験が昭和29年から、五号地区の南、現在の総合スポーツ公園の東側で行なわれた。この実験栽培により、従来の稲作は、8月下旬に根腐れによる秋落ち現象を起し収量が低下したが、早期栽培は8月下旬に収穫されるので、秋落ちを回避できる。また、

台風来襲の頻度が高い9月中下旬を避けることができるなどの有利性が実証され、収量も反当たり5～7俵から8～9俵と増収になった。このように、早期栽培は安定多収穫であることから、神野新田や吉田方はもとより、東三の沿岸部、渥美全域に広く普及した。

**温室園芸の隆盛** 明治時代、渥美郡吉田方村と呼ばれた今の豊橋市西部地区に住んでいた精農家中島駒次、中島葎太郎は、当時の一般的な露地栽培から脱却して、明治30年頃より研究努力を重ね、明治34年にガラス温室によるシシトウ栽培を始めた(2-14)。続いて、同温室によるトマト・キュウリ・メロンの栽培に成功した。この温室による園芸経営が画期的な農業であり、露地栽培と比較して有利である事が立証されたため、明治40年頃より同地方の農家の間で温室熱が高まり、温室園芸への転換を志す者が次々に現われ始めた。昭和4年、温室経営農家も増加したので、豊橋温室園芸組合を設立し、全国に先駆けて温室の専門組合が発足した。発足4年目の昭和7年にはトマトについて市場販売の基本である共同選果を全国のトップを切って決行し、共同出荷体制を確立した。これは、全国の各荷受け市場で好評を博し、以後市場販売の基となったといわれている。

戦時中はガラス温室の反射が敵機空襲の標的にされやすいということで、いろいろと制



2-14 明治時代のガラス温室

約を受けたが、戦後は農業を温室に求めようとする農家は多く、主要作物は年と共に移り変わり、新種目の探索が続いた。昭和30年頃、吉川の温室園芸家井川六蔵、大林重治らが石川県より、大葉(青紫蘇)の種を取り寄せ研究を始めたのが大葉導入の始まりである。当初は研究に専念したが思わしい結果が得られず、幾多の辛酸をなめたが、栽培法の改良、新品種の導入など、努力を続け、市場販売が可能なまでに技術開発を進め、昭和37年から販売を開始した。

其の後、販売網の整備と共に栽培面積も拡大し、豊橋はもとより、東三河地域に広く普及して、その栽培面積は170haとなり、全国流通量のおおむね60%を占める主要特産地を形成するに至った。昭和40年代に入って、豊橋の温室園芸は「つまもの」の時代を迎え、組合の組織も大葉部会を始め、菊花・花穂・エディブルフラワーなど9部会で構成され、組合員も290名を擁し、温室園芸農家の拠点となる組合に成長した。

## (2) 海の恵み

野依区有文書「牟呂村地先海面新開につき書き上げ」によると、吉田方と六条潟のかかわりは古く、400年前の領主、池田輝政によって、六条潟の沿岸15ヶ村はその共同利用を認められ、村は運上米を納め、石高によって利用権を定められていた。運上分担表に三ツ相、野田、吉川、馬見塚も名を連ね、六条潟に依存していた事がわかる。当時は浅蜆あさり、蛤はまぐりなど食用貝類のほか、藻草・にら・よらめ貝などが大切な肥料として採取され、乾燥して貯蔵し、換金することもできたと伝えられている。よらめ貝は昭和初期まで肥料として用いられた。

六条潟は魚介類や海藻の豊富な海域で、豊川河口の汽水域では蜆しじみやししび貝がとれ、蜆は食用に、ししび貝は養鰻の稚魚の餌付用として用いられた。河口から沖に出た遠浅の海

域では浅蛸や蛤がとれ、浅蛸は佃煮に加工され名古屋方面に出荷された。

吉前海岸では白砂青松に恵まれた海水浴場の海開きと共に、大潮の期間中は立干網漁が行なわれ、ダツ・サヨリ・スズキ・ボラ・カレイ・フグなどが大量に入り、豊橋市内や岐阜方面の団体客で賑わった。ハゼ釣りも盛んで8～9月には渡津橋から吉前海岸まで釣人が立ち並び盛況を極めたが、昭和35年頃より魚類は減少し、立干網漁も見られなくなった。

**海苔の養殖** 六条潟の海苔養殖は、明治26年に牟呂大西の芳賀保治が粗朶筭<sup>そだひび</sup>で海苔養殖の実験に成功したのがはじまりとされ、その後、養殖技術の改良が進み、31年には牟呂、前芝にわたる8地区の漁業者を糾合して、豊川河口に25万坪の海苔採取場を設けた。吉田方も三ツ相・馬見塚・高洲・青竹・富久縞・五号・吉前で、農家の副業として海苔養殖に従事する人が次第に増加した。その後、昭和初期に至る間は生産が伸び続けたが、太平洋戦争後半は筭材料の入手困難や人手不足などにより生産が減退した。戦後は昭和23年頃から生産体制が復旧し、また、技術革新も著しいものがあり、粗朶筭<sup>そだひび</sup>から網筭<sup>あみひび</sup>へと変わり、人工採苗技術の開発が昭和32年頃から行なわれた。さらに、昭和39年頃から海苔網冷蔵保管技術が普及した。これは、人工採苗と共に革新的な技術で、海苔の安定生産に大きく寄与した。生産額も大幅に伸びたが、昭和42年「三河港造成にともなう漁業補償金の受け入れ」が決まり、海苔生産者は次第に転職していった。

**養鰻業の盛衰** 大正末期に遠州から来た青木光栄・鈴木峯太郎らが企業的な養鰻経営を始めた。これが吉前の養鰻の始まりであった。この頃の吉前は葦原や畑の続く中に民家の点在する地帯で、豊川を遡上する「しらすうなぎ」も容易に捕獲することができ、地下水も豊富で新たに養鰻を始めるには絶

好の適地であった。鈴木峯太郎は天竜川河口の養鰻先進地の技術を伝え、地元養鰻の発展に尽力し、養鰻に参入する人も次第に増加した。戦時中は餌の入手が困難となり一時衰退したが、戦後は再び増加に転じ、全盛期には吉前・五号の養鰻池は約20haとなった。昭和後半頃より台湾、中国から安い鰻が輸入されるようになり、安値定着となった。輸出国との賃金格差に対抗し、経営合理化を図るため吉前でも加温ハウスの建造が盛んに行われたが、「しらすうなぎ」の激減による価格の高騰、昭和48年のオイルショックによる燃料費の高騰などが経営を圧迫し、単なる加温ハウス池や、露地池は経営困難となり養鰻は減少した。最近では、飼養管理に集約高密度養殖の技術を確立した一部の人々によって養鰻が行なわれている。

### (3) 商工業の発展

**協同組合豊橋総合卸センターの設立** 協同組合豊橋総合卸センターは、昭和50年5月、盛大にその完成式典を挙行した。富久縞町（現問屋町）に総面積238,949.57㎡（72,400坪余）の広大なニュータウン、商業卸団地が完成したのである。

当時は田んぼと畑しかなかったこの地域に、食品・繊維・靴はきもの・金物機械・雑貨等、54社（当時）の集団化企業組合が発足し、東三河地域における流通拠点としての役



2-15 豊橋総合卸センターの全景

割を果してきた。さらに、この卸団地のオープンに合わせるように、市道吉田方線（かもめ通り）が開通した。この道路は現在、市民病院、総合スポーツ公園等へのアクセス道路として重要な役割を果たしている。

**小売業の移り変わり** 昭和40年代に入り、景気が右肩上がりの好況を迎える中、自動車の急速な普及により、一家でも1台、2台と自家用車を持つようになり、ガソリン・軽油等の燃料消費量がうなぎのぼりに増加した。当校区内でも国道23号線（蒲郡街道）を中心にガソリンスタンドが次々とオープンした。また、自動車の販売会社、修理工場等の自動車関連産業の進出も盛んであった。そして、これらの産業は地域の活性化推進に貢献してきた。

高洲町の23号線より東側の地域は市街地に近く、交通の便もよく住みやすい環境であるので、住宅をはじめ、アパート・マンションなどが急増し、人口の増加が著しい。それらをめざして大型のスーパーマーケット・ドラッグストア・コンビニ・飲食店などがつぎつぎと進出してきた。

反面、それより西の地域については、商業卸団地以外は大きな商業施設といわれるものはほとんどないが、かつて三ツ相町にあった自動車車検場が昭和63年(1988)10月、五号(神野新田町)に新設され、豊橋自動車検査登録事務所として発足し、新たに「豊橋」ナンバーのプレートが誕生した。

さらに、平成14年2月、豊橋温室園芸農業協同組合が菰口町から高洲町へ移転新設され、この地域の拠点として、全国各地に向けて生産物の販売、事業の拡大を図っている。

また、五号(神野新田町)にはホテルシーパレスがあり、校区内唯一のリゾートホテルとして多くの顧客に、サービスを提供している。平成20年(2008)4月には高洲町に吉田方中学校が開校される予定なので、

近い将来、この地域も新たな展開が期待されている。

**戦前からの工業** 昭和30年(1955)代以後、いわゆる神武景気と言われた頃から、吉田方校区に進出した中小の生産工場は少なくないが、ここでは、戦前あるいは戦中から校区に根付いて発展してきた工業の主なものを取りあげる。

**テイサク** 旧名は、帝国鑿岩機製作所、テイサクと社名を改めたのは昭和61年(1986)である。

昭和7年(1932)に初代社長の伊藤金太郎が名古屋市南区熱田新田に土木建設関係の機械をつくる工場を建てたのが始まりであった。ジャックハンマー・ドリフター・ストーパーなどがおもな製品であった。創業以来事業は順調に発展した。

昭和14年(1939)、豊橋市新栄町字小向37番地に豊橋工場(当社の第三工場)を建設、ジャックハンマーやドリフターを製造してきたが、昭和20年(1945)終戦と共に一時業務停止、全工場を閉鎖しなければならなくなった。しかし、状況が好転し翌年3月、業務再開、操業を開始することができた。

以後は列島改造ブームの中で業績を伸ばし相次ぐ増資を重ね、製品も大型ブレーカーやドリフターを中心に生産規模や、生産額を急増させた。

昭和52年(1977)大型油圧ブレーカーUB7を発売、これが第二の発展の契機となり、UB機種のほかにも新製品も加えて、業績は飛躍的に進展した。

昭和61年、最新鋭の生産システムの導入に努め、以来、様々な建設現場に適応する高性能マシーン製作に取り組んでいる(2-16)。

なお、昭和22年、豊橋市立西部第三中学校(吉田方中学校の前身)が新制中学校としてのスタートをきるときは、施設がなかったの





2-16 現在のテイサク工場

で、帝国鑿岩機製作所の工場の一部を間借りしての開校であった。

**高橋製糸場** 豊橋市は明治から昭和の初めにかけて、「蚕都豊橋」と呼ばれるほど製糸業が盛んであった。吉田方校区にも中小の製糸工場がいくつかあったが、戦後絹糸需要の減少とともに、廃業があいついだ。その中で平成の初めまで営業を続けてきたのが高橋製糸場である。

高橋製糸は明治38年(1905)高橋善治郎が操業を始めた。繭からの製糸には、蚕一匹の作った繭(精繭)から糸をひく生糸製糸と、蚕二匹が作った繭(玉繭)から糸をひく玉糸製糸がある。高橋製糸は後者の玉糸製糸で、平成の時代まで操業を続けてきたのは高橋製糸場と、大林製糸場(羽根井)・浅井製糸場(松山)の三工場だけだった。この



2-17 高橋製糸場

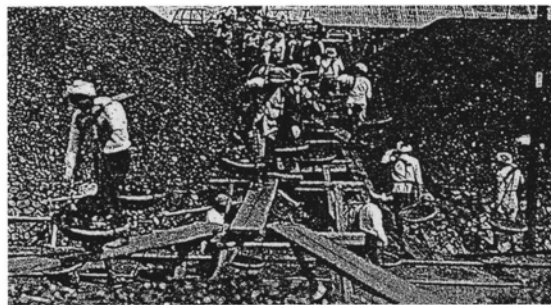
三工場だけで、全国の玉糸の8割を生産していたという。玉糸からつくる製品は高級品の着物地、洋服地などのほか、本の表紙布としても使われた。

このように、豊橋製糸業の伝統と歴史を担って操業を続けて来た高橋製糸場も時流には勝てず、平成にはいってまもなく廃業してしまった。

**鈴与煉炭三ツ相製造工場** 大正12年(1923)清水市で創業した鈴与商店では販売部の有志が設立した煉炭製造工場が時流に乗り、○に煉のマークのはいった「清水煉炭」は売上の急増をもたらした。

これをうけて、豊橋支店でも早速煉炭製造を計画、船町の豊川沿いの地に工場を建設し煉炭の製造を始めた。しかし用地が狭く、需要に応ずる生産設備が出来ないので、用地を物色、昭和8年(1933)に三ツ相地内の豊川沿い(現在のの上渡津橋付近)に新しく煉炭製造工場を建設した。新工場は、敷地面積3万㎡と広く、主要な建物2棟からなり、昭和13年(1938)煉炭生産は一挙に年間15,000tに達するほどであった。

原材料の石炭は貨物船で河口の沖まで運んできて、そこから30tほどの舢はしけに積み替え、堤防下の港につけた。ここでは船から堤防の上まで道板を渡し、仲士さぶらがてんびんぼうに石炭を盛り天秤棒で担って堤防上のトロッコまで運び上げた。仲士の仕事はこの繰り返しだったが、運び賃は、1回で1銭、1日に百回運んで1



2-18 仲仕による石炭運搬風景

円になる。地元の人が10人ぐらいこの仕事に従事していたが、工場で働く工員の日当が1日30銭ぐらいの頃だから、良い稼ぎだった。ちなみに、当時、米1俵が5円ぐらいだった。

こうして煉炭製造の業況は順調な進展を続けてきた。しかし、昭和16年（1941）太平洋戦争に突入してからは次第に統制がきびしくなり、原料炭の入手も思うに任せぬようになった。そして、戦争末期から終戦へと苦難を乗り越えて戦後を迎えたが、なお好転せず、ついに、煉炭は清水工場で集中生産することとなり、三ツ相製造工場は昭和25年末をもって閉鎖されるにいたった。

**山口毛織** 山口毛織は昭和9年（1934）、豊橋市菰口町で産声をあげた。昭和20年（1945）1月12日、資本金15万円で山口毛織株式会社に組織替えをし、社長に山口唯次が就任した。しかし、まもなく終戦を迎え、会社の経営は危機に直面することになった。食糧をはじめ、厳しい物不足が続いた。しかし、焼け跡の中から復興に立ち上がろうとする気運がしだいに台頭し、戦後の物不足の時代を反映して、毛織物に対する需要も急速に高まっていった。

やがて、会社の業績は上向きに転じ、23年の5月24日には、資本金を一挙に250万円に

増資し増産をはかることになった。この時の設備は毛織機53台、紡毛機1セット、付属準備機一式だった。24年からは海外市場にも眼を開き、中近東・東南アジア向けの輸出を始めた。

こうした業況の進展に対応して、27年には市内中野町に梳毛紡績工場を建設。ここでは、紡毛を主とすることになり、設備はリング紡績機4台（4000錘）をそろえ、市内でも屈指の毛織物生産工場となった。

その後29年資本金1,000万円に増資。32年子会社丸よ羊毛工業を合併して資本金2,000万円に増資、以後同年9月、資本金4,700万円に増資、紡績機など設備を増強し、対米毛織物輸出に本格的にとりかかった。

35年から、37年にかけて三次にわたる合理化を実施、資本金5,700万円に増資と社運の絶頂期を迎えたが、このころから、合成繊維のナイロン・テトロン・ポリエステル・アクリルなどがつぎつぎと量産されるようになり羊毛製品の需要は次第に低下していった。加えて、国際的な経済環境の厳しさも高まりついに昭和46年3月、昭和9年以来37年間続けて来た毛織物生産の工場を閉鎖することになった。



2-19 上から見た山口毛織工場

## 第3章 教育と文化

### 1 学校教育 幼児教育

#### (1) 明治以前の教育 寺子屋と私塾

明治になって学制が発布される以前の教育機関としては、武士の子弟のための藩校（吉田藩では時習館）があったが、一般庶民の子弟のためには寺子屋や私塾が機能していた。

当地区の寺子屋としては、馬見塚の専求庵（現在の専願寺）、三ツ相の栄昌寺、吉川の香福寺、野田の法香院のものが知られている。私塾では、高須新田の庄屋白井八兵衛のもの等があったが、それらはいずれも僧侶をはじめ、地元では学識があるとされた師匠が、十数人程度の筆子（寺子）を集め、いわゆる「読み・書き・そろばん」を授けていたものであった。その中心は手習い（習字）で、その中で修身的な内容及び日常生活や生産活動に関する知識・技能の伝授もあわせて行われていた。

#### (2) 学制発布と吉川学校の誕生

明治5年（1872）7月の学制発布に伴い、県下に10の中学区と120の小学区を設置する計画が立てられたものの、直ちにこれを実現することはできず、まずは旧来の流れを汲む郷学校や義校でこれをつないだ。当初は当地区に第117～119小学が設置される予定であったが、結局は第10中学区の第5番小学「吉川学校」が吉川の香福寺内に明治6年（1873）10月24日に開設された。しかし、当分の間は校舎は新築されず、寺の本堂と客殿を仮校舎として利用していた。制度上では最初の4年

間を下級小学、続く4年間を上級小学とし、ここまでを義務教育としようとしたが、就学率は高くはなかった。

明治8年（1875）8月になると、第10中学区の第6番小学として、「高洲学校」が、高洲村屋敷通の札場に新設され、高洲・馬見塚・青竹・富久縞村の子どもは吉川学校から分離されている。翌年にはここに夜学も開設されたが、児童数の減少により、明治20年（1887）には牟呂学校に合併されてしまい、一旦は同校の分校となった後、明治22年（1889）には町村制により閉校となった。

一方明治13年（1880）には吉川学校が校名を三吉野（三ツ相・吉川・野田の頭文字）学校と改称、明治17年（1884）には野田村の素盞鳴神社の南側に新校舎を建設している。

明治19年（1886）の小学校令により、尋常小学校4年・高等小学校4年制となるが、高等小学校は義務制ではなかった。明治21年（1888）になると渥美郡内の学区整理により、幡太学校・花ヶ崎学校が三吉野学校に合併された。

当初小学校の運営は、義務教育とはいえ授業料を徴収しており、親の負担は大きく、これが就学率低下の要因ともなっていた。その後明治23年（1890）小学校令の改正で授業料を廃し、村費より支弁とすることとし就学率の向上が図られた。

また、当時は小学校にも落第の制度があり年間2回実施された定期試験は厳格なものであったといわれている。

### (3) 現在地に吉田方尋常小学校がスタート

明治25年（1892）新小学校令により渥美郡吉田方村吉田方尋常小学校と改称され、現在地（吉川）に新校舎が建設された。明治28年（1895）5月には高等科を併設、名称も吉田方尋常高等小学校となった。この頃の教科は尋常科で修身・国語（読本・作文・習字）算術・体操・図画・唱歌で、高等科では、地理・裁縫・農業等がこれに加わったという。教科書は当初自由発行・自由選択制であったが、徐々に制約が加えられるようになり、明治36年（1903）からは完全に国定制となっている。

明治35年（1902）には私立の神野小学校が廃校となり、神野新田の児童は牟呂尋常高等小学校に通学することになったが、五号のみは明治45年（1912）から吉田方校区となって、大正9年（1920）低学年児童の雨天時の牛車通学が開始されたといわれている。



3-1 低学年の牛車通学（大正10年）

これより先の明治40年（1907）には小学校令が改正されて尋常科6年、高等科2年制となり、6年生までが義務教育とされて校名も渥美郡吉田方尋常高等小学校となった。

大正元年（1912）には式場兼用の教室（御真影奉安所付）を増設、大正4年（1915）には校地を拡張して校区大運動会が開催された。大正9年（1920）には高等科用の農業実習地も確保され、大正14年（1925）には初の2階建校舎が完成した。また大正の末頃から

は小学生にもようやく洋服姿が増えてきたようである。

校区では大正の初め頃から豊川の堤防や各家庭から土や石を集めて校庭に築山を作り始めていたが、大正13年（1924）摂政宮殿下（後の昭和天皇）のご成婚を記念して青年会がこれを移設完成させて、当時の伊藤要蔵校長が「大正山」と命名し、吉田方小学校の名物となっていた。

### (4) 豊橋市吉田方尋常高等小学校に

昭和に入ると昭和7年（1932）渥美郡牟呂吉田村は豊橋市に合併して晴れて豊橋市吉田方尋常高等小学校となった。



3-2 昭和8年にできた鉄筋コンクリート造の講堂

翌年、当時としては立派な鉄筋コンクリート造の大講堂も完成するが、満洲事変・日華事変の勃発に伴い学校教育にも軍事色の影が忍び寄ってきた。

### (5) 豊橋市吉田方国民学校の時代

昭和16年（1941）太平洋戦争開戦の年、国民学校令が公布され、吉田方国民学校初等科・高等科と改称されて、その教育課程も国民科・理数科・体錬科・芸能科にまとめられ、その評価も長年なじんできた甲・乙・丙から優・良・可に改められている。これにより軍国教育の色彩がますます強まり、戦時教育体制が確立されてきた。

戦争末期になると本土決戦に備えて、陸軍部隊が国民学校にも駐屯してきたが、空襲の被害を防ぐことはできなかった。昭和20年(1945)6月19日深夜から翌未明にかけて、米軍のB29爆撃機136機による焼夷弾攻撃を受け、吉田方国民学校は鉄筋コンクリート造の講堂を除き、全校舎を焼失してしまった。

こうした中で小学校では、焼け残った講堂を6室に区切って仮教室としたほか、吉川・菰口・高洲の集会所、専願寺他の寺院、吉川神明社の本殿等9か所を借用して学年別に分散授業を再開したが、机・腰掛すら満足になく、寺子屋時代並みの状況になってしまっている。人的な面でも若い男性教員が兵隊にとられてしまい、これを補充するためには女性の代用教員でしのいでいた。

一方、疎開児童等の受入れで、一時期には1学級の児童数が70名を超える状態になったこともあった。

昭和20年(1945)8月15日の終戦を機に、わが国の教育は大転換が図られ、GHQ(連合国軍総司令部)の指示のもとに教育者として不適格な者の追放が進められ、民主教育の推進に懸命となった。まず国家神道と教育との分離が図られ、奉安殿は撤去された。地理・歴史・修身の教育も禁止され、武道も姿を消した。教科書は一般には上級生の物を譲り受けていたが、内容に問題のある個所にはすべて墨を塗らされた。まもなく新しい内容の教科書が配布されるようになったものの、新聞紙然とした紙質の悪い大判のもので、児童が各自で切断して綴じ込まなくてはならないものであった。

### (6) 豊橋市立吉田方小学校に

昭和22年(1947)に新しく学習指導要領が発表されて、これによって新たに社会科・家庭科・自由研究が登場した。自由研究は後に

特別活動の一部となるが、他はその後も重要な教科として残されている。この時豊橋市立吉田方小学校という現在の名称になって新しい小学校として再スタートした。この頃から市内の小学校でもPTAが結成され始め、昭和23年(1948)7月には本校でもこれが発足している。当初は学校教育を財政的に支える教育後援会的な性格が強かったが、その後は徐々に本来の活動が展開されてきている。

本校では戦時中から児童が材料を持参する形で副食(みそ汁)のみの給食が行われていたが、昭和23年(1948)末にはミルクと副食の給食が復活、給食調理場を増設している。昭和25年(1950)10月には学校用上水道も完成、翌年1月からは市内の全小学校で一斉に主食のパンを含む完全給食が開始されている。その後、昭和36年(1961)には給食調理室も改築されたが、昭和47年(1972)からは給食センター〈昭和51年(1976)から西部学校給食共同調理場に移管〉より配送される現在のシステムに切替えられた。

校舎の復興面では昭和23年(1948)に南校舎(7教室)・中校舎(3教室)を中心とする木造の新校舎及び宿直室が竣工しているが、この建設には校区民の協力が大きく、富久縞・吉前方面の堤防の松並木も建材の一部として使用されたといわれている。昭和27年(1952)には2階建ての4教室もできたが、翌年秋には台風13号が当地を襲い、神野新田及び吉前町の堤防が決壊、特に吉前町は全戸が水没、児童は長期にわたり吉川町の香福寺に宿泊してここから通学するという災禍に遭っている。しかし一方では校舎の増築も着々と進み、昭和30年(1955)には木造2階建て4教室、昭和40年(1965)には初の鉄筋校舎3階建3教室の完成を見た。昭和45年(1970)には火災により2教室を焼失したものの、翌年には北校舎鉄筋3階建12教室を竣工させ、

昭和47年（1972）には戦災で焼け残っていた講堂を本格的な体育館に改築、学校としての体裁は着々と整ってきた。かくして同年には創立百周年を迎え、記念誌を刊行している。

なお、戦後の主な研究活動としては、昭和31年（1956）に市指定の社会科研究発表会を開催、校歌も発表されている。また同年東海三県下学校図書館コンクールで入賞、翌年には同コンクールで第2位の成績を挙げるに至っている。

昭和36年（1961）になると豊鉄バスの吉前・五号線が開通、五号・吉前・富久縞町の児童はバスで通学をするようになった。これにより名物となっていた雨天時の低学年の牛車通学はピリオドを打っている。

昭和49年（1974）には親子TV20台を設置、これは学習の現代化の第一歩としてのテレビの導入であった。以後テレビ学習の集大成として、昭和62年（1987）には愛知県の放送教育研究大会の会場校となり、県下の教員にその成果を発表している。この間昭和43年（1968）には学習指導（自発教育）の研究指定校を受け、昭和54年（1979）には県の社会科研究大会の発表を行っている。また平成元年（1989）には郷土学習読本「よしだがた」を発行、以後改定を重ねて有効に活用されている。

その他施設面では、昭和38年（1963）に待望のプールが完成、当分の間は中学校と共用という形で使用を開始している。昭和48年（1973）に管理棟を完成させ、昭和56年（1981）には南校舎を増築、増加を続ける児童数に対応したが、その後は内容の充実にも努め、平成7年（1995）には南棟の大規模改修が開始され、平成9年（1997）からは中校舎のサッシ取り替え工事等が進められた。平成15年（2003）には家庭科室・資料室の改修を終えたが、その後一旦治まったかに見えた児童

数の増加は21世紀に入るとふたたび顕著になり、平成16年（2004）には遂に在籍児童数が市内の52小学校の中で最大に達し1,000名を突破するに至った。



3-3 市内一のマンモス校となった吉田方小学校

そこで、校区民の懸案であった隣接の吉田方中学校を高洲町長弦に移設し、その跡地を小学校に取り込む計画が具体化し、平成20年（2008）4月には中学校の移転を完了、その後小学校が拡張整備されることになった。これによって吉田方小学校はやっと過密校の悩みから脱却できることになるが、相変わらず過大校としての問題は残るであろう。

なお、運動の面では平成13年（2001）にバスケット男子が、翌年には同女子が市内優勝の偉業を成し遂げている。

### (7) 西部第三中学校から吉田方中学校へ

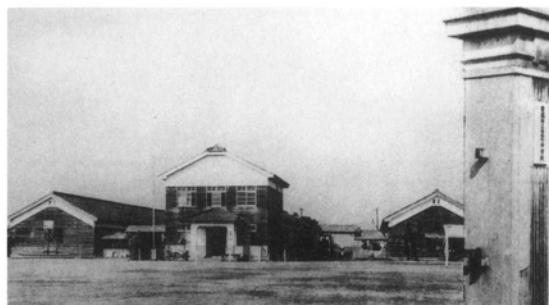
太平洋戦争の敗戦を機にわが国の教育制度は全面的に改められたが、昭和21年（1946）11月3日発布の新憲法の理念に基づき制定された教育基本法、学校教育法によって六三制の新教育がスタートした。義務教育年限の3年間延長、男女共学制の採用等、戦勝国であるアメリカの影響を多分に受けたものであったが、これにより豊橋市内にも10校のいわゆる新制中学校が発足した。当初の市の方針では吉田方と牟呂とを併合する計画が進められ

ていたが、校区民の熱望により吉田方は晴れて独立した中学校として認められたとのことである。

新しい制度はスタートしたものの、施設がこれに伴わず、多くの新制中学校が小学校に間借りしたり、旧軍隊の施設の払下げを受けて苦難のスタートをきっている。その中で吉田方中学校の前身である豊橋市立西部第三中学校（略称西三中）は新栄町東小向にあった帝国鑿岩機豊橋工場の一部に間借りしての開校となった。体育館はおろか運動場も特別教室も満足になく、それはまさに半身不随の姿であった。そのような中で昭和22年（1947）4月18日職員数12名、生徒数204名の陣容により開校式を挙行し、5月1日からは授業を開始しているが、このような状況を見かねて、同年早々には校舎建築委員会を発足させ、戦時中に国民学校の拡張用地として確保され農場となっていた用地（現在の吉田方中学校の場所）に新校舎を建設することを決め、翌年3月1日には早くもその起工式を挙げている。そして同時に高師にあった元陸軍兵器庫2棟の払下げを受け、解体の上、校区民の奉仕作業で農家の牛車を動員して吉川町まで運搬して来た。このような努力の甲斐もあって2学期からは新校舎への移転が成り、同年10月11日には一部2階建の本館を含む木造平屋建3棟の校舎の完成を祝う新築校舎落成式と記念校区運動会が盛大に開催されており、校名も10月1日より豊橋市立吉田方中学校と改称され、名実共に吉田方の中学校になったのである。

なお、本校は自前の新校舎を持つ市内で最初の中学校と言われている。

新校舎のできた翌年1月には校地拡張委員会が結成され、3月から翌年にかけて校庭東側の田圃を石炭殻で埋め立てる作業が校区民の奉仕によって進められた。また同時に、校



3-4 市内で戦後最初に建った吉田方中学校の新校舎

区の各家庭より寄贈の樹木100本が校地に植栽され、環境整備が図られている。昭和23年（1948）3月卒業の第1回卒業生は、高等科よりの編入希望者で編成されていたため、僅か1学級で20名しかなかったが、第2回生からは学年2学級以上となって安定してきた。

そのような中で、昭和24年（1949）3月には初の修学旅行が実施されているが、これは満員の汽車に一般客と混乗し、食糧の米を持参しての厳しいものであった。



3-5 旧渡津橋下での中学校の水練会

昭和25年（1950）の夏からは、専願寺裏の豊川で水練会が行われ、以後プールが利用できるようになるまで何年間も続けられている。また同年には校章が、翌年には校歌が制定され、昭和31年（1956）には校旗も同窓会から寄贈されている。そのような中で菰口町の線路西側では新幹線の敷設予定用地を国から借り受け、中学校の実習田として昭和34年（1959）秋まで生徒たちが農作業に励む姿が見られた。

この間には施設の充実も進み、昭和36年(1961)には技術室・調理室ができ、翌年には通学用の自転車置場も完備されるに至った。

待望のプールは昭和38年(1963)に小学校内に竣工したが、まずはこれを小・中で共用



吉田方小学校の校章



吉田方中学校の校章

するというスタートになっている。昭和41年(1966)には運動場が拡張され、昭和43年(1968)秋には鉄筋4階建の新校舎が起工された。そして昭和54年(1979)にかけて6期に分け、徐々に現在の校舎を完成させ、昭和46年(1971)には体育館の竣工を見ている。昭和43年(1968)にはテニスコート、昭和50年(1975)には中学校専用のプールができて、平成元年(1989)柔・剣道場(吉翔館)の完成で一段落をみせたのであった。

またこれらの施設の充実を受けて、昭和35年(1960)には文部省より産業教育の研究指定を受け、昭和40年(1965)には県・市の道徳教育研究指定校となっている。また昭和44年(1969)からは中学校でも完全給食の実施に踏み切っている。また昭和45年(1970)からは伊古部の野外教育センターに1年生が宿泊しての野外教育活動が開始され、これは場所を変えて現在も続けられている。昭和50年(1975)からは2年生が視聴覚教育センターでの計画学習を受けることができるようになった。また昭和49年(1974)には文化祭、昭和55年(1980)には立志式がスタートした。そして平成2年(1990)には「母なる豊川」を活かした体験活動として手作りカヌーによる豊川往復挑戦が開始され、今や他校ではまねのできない吉田

方中学校の伝統行事として定着しつつある。

これは、当初1年生はタイヤチューブ、2年生はカヌー、3年生はいかだでスタートしたが、間もなく2年生の学年行事となり、鉄パイプ入り木製の1人乗りから、塩ビ製の2人乗りへと進化している。そのコースも三ツ相⇔金色島を基準としているが、年度によって多少の変化をつけたこともあり、日本船舶振興会から30万円の助成をうけたこともあった。各クラス6班編成で選択の時間にアイデアを凝らして自作し、事前にプールを使ってリハーサルも実施している。

また部活動も活性化し、運動部では平成5年(1993)にバスケットボール部男子が東海大会に出場、平成16年(2004)には野球部が県大会準優勝、東海大会に出場する等輝かしい成果をあげ、文化部でも平成6年(1994)の県吹奏楽コンクール東三大会で金賞の成果をあげている。



3-6 移設を前にした吉田方中学校

### (8) 農業補習学校から青年学校へ

明治末期から大正にかけて、小学校を出て就農する者のために、農業補習学校が設けられた。吉田方では大正2年(1913)開校、牟呂の分校として冬季農閑期の夜間に開かれていたというが、大正8年(1919)にはこれが独立、大正11年(1922)になると2年制の昼間部も設けられている。

一方大正15年(1926)には小学校内に青年訓練所が併設され、この方の教練指導は在郷軍人が担当し、軍事教育が重視されていた。



双方は内容的に重複面も多かったため、昭和10年（1935）に青年学校令が出され、両者を統合した形で小学校内に青年学校が置かれた。小学校卒業後入学する2年制の普通科と高等科を出てから入る本科（男子5年、女子3年）があって、さらにその上に研究科・専修科もあった。教育内容は補習教育・職業教育・軍事教育の3分野から成り立っていたが、次第に軍事教育が重視されるようになったもののこれは敗戦とともに廃止されてしまった。

### (9) 保育園と幼稚園

昭和4年（1929）、小学校の校舎内に農繁期託児所が開設された。最初は1室だけであったが、翌年にはこれが吉田方保育園となった。小学校長がその主事を兼ね、運動会も学芸会も小学校と合同で行なっていた。次第に遊具等の施設も充実してきたが、昭和20年（1945）の戦災により小学校とともに焼失、一旦は消滅してしまった。

戦後は昭和27年（1952）に香福寺に隣接する現在地（吉川町）に旧陸軍兵器庫の古材を利用したりして新しい園舎が建設され再スタートをした。その後敷地・建坪とも建設当時の3倍を超え、平成18年現在では43名の職員と299名の園児を収容している。

一方吉田方西保育園は昭和51年（1976）同じ社会福祉法人吉田方保育園により小向町西小向に開設された。現在は39名の職員と228名の園児が元気に生活している。

これより先の昭和47年（1972）には学校法人みゆき学園の高洲若葉幼稚園が高洲町小島にオープン、こちらはスクールバスで校区外からの園児も迎え入れ、すでに2,000名余の修了児を出すに至っている。

### (10) 吉田方小・中学校の校歌

吉田方小学校では昭和31年（1956）、中学

校では昭和26年（1951）にそれぞれ校歌が制定されたが、いずれも高洲町出身の元愛知大学学長久曾神 昇（ひたく）氏の作詞によるもので、郷土「吉田方」の姿が高らかにうたいあげられている。

#### 吉田方小学校校歌

1. 一千年の 昔より  
名高い渡り しかすがも  
今はゆたかに ひらかれて  
五穀はみのる 吉田方
2. 太平洋の くろしおも  
流れおさまる 渥美湾  
海へのさちも 数多く  
めぐみつきない 吉田方
3. 日進月歩 さかえゆく  
工業文化 目のまえに  
はげみいそしみ たゆみなく  
希望にのびる 吉田方

#### 吉田方中学校校歌

1. 現<sup>うつ</sup>しき国と あれ出でぬ  
一千年の 昔より  
しかすが渡りと 賞でられし  
吉田方こそ 吉田方こそ 栄えあれ
2. 清き流れの 豊川と  
太平洋の 珍<sup>うずしお</sup>貴しおぞ  
みそぎ寿ぎ 生みなせる  
吉田方こそ 吉田方こそ 栄えあれ
3. 永<sup>と</sup>久に盡<sup>つ</sup>きせぬ 海の幸  
数<sup>かず</sup>え知られぬ 野のたから  
五<sup>ご</sup>穀の、みのり ゆたかなる  
吉田方こそ 吉田方こそ 栄えあれ
4. 慈愛あふるる 師を仰ぎ  
浄き心の ますらおが  
誠ひとすじ 学びたる  
吉田方こそ 吉田方こそ 栄えあれ
5. 平和日本の 建設も  
郷土文化の 発展も  
われら健児ぞ にないたる  
吉田方こそ 吉田方こそ 栄えあれ

## 2 社会教育

### (1) 社会教育委員会活動

昭和24年(1949)に社会教育法が制定され、翌25年(1950)には法に基づく社会教育審議会が豊橋市にも設置された。そして戦後の社会教育活動が本格的にスタートした。

豊橋市は全国的な動きに先立って、昭和22年～23年(1947～1948)にかけて各校区に社会教育委員会が組織され、昭和24年(1949)には連絡協議会が結成された。

吉田方校区も、同年杉浦卯三(菰口町)を会長として組織を立ち上げ、連絡協議会に加入した。この年50小学校区の内では組織されたのは22校区であった。

発足以来当委員会は、昭和20年代のナトコ映写機による映画会(旧吉田方小学校講堂)や社会学級、青年学級の開催、また昭和40年代に入り地区市民館、校区市民館が整備されると市民館まつり、成人式、青少年健全育成など校区の総合的なコミュニティーづくりを進める中心的な団体として活動してきた。

### (2) 市民館活動

吉田方地区市民館は昭和53年(1978)に高洲町の旧渡津漁業協同組合の跡に開館し、自主グループ活動の場として利用され、活動も年々活発となってきた。そして昭和57年(1982)には地区市民館が改築されて新館となり、昭和58年(1983)に吉田方小学校の敷地内に開館された校区市民館と共に校区の人達の文化活動の場として、よく利用されている。

市民館では舞踊、カラオケ、英会話など40有余の自主グループが活動をしているが、新しく日本画(講師は日展入選の高木基恵先生)、剣詩舞など著名な講師の講座も開設されている。また、手品、パンづくり教室、高齢者セミナー、地域いきいき子育て促進事業

(年間25回)を開催するなど、生涯学習の拠点としても利用され、地区市民館、校区市民館は校区社会教育に大きく寄与している。

両市民館には、年間4万人以上の利用者や来館者があり、校区民にとってコミュニケーションを図る場として今やなくてはならない存在となっている。秋には2日間にわたって開催される地区市民館まつりは来館者も多く、大変な好評を博している。1日目からの作品展は自主グループ、趣味の教室などの力作が多数展示され、また10年程前から小・中学校、保育園の協賛を得て子供作品の展示もあり、親子ともども来館し楽しんでいる。2日目の芸能発表会は、カラオケ、新舞踊、太鼓、大正琴、エアロビクスなど市民館利用者にとって日頃の活動の発表の場として賑やかに開催されている。また、市民館まつり開催中は校区婦人会が中心となって、おしるこ、甘酒、お茶の接待を行っている。

今後ますます少子高齢化が進む社会において、コミュニティーづくりや、生涯学習という観点からも市民館活動の役割はますます重要度を増していくと考えられる。



3-7 市民館まつり

### (3) 青少年教育

**成人式** 成人式は、社会教育委員会が主催する大切な行事の一つである。豊橋市では、昭和24年(1949)に第一回の成人式が各校区で

実施された。吉田方校区は昭和57年（1982）までは小学校や中学校の体育館で行われてきたがその後は地区市民館の2階大集会室で行われている。

以前は、成人式が楽しく盛会にできる様に元小・中学校PTAのママさんコーラス部の方々が「新成人に贈る歌」と「市歌」を先導合唱し、新成人を始め全員が合唱した。昨今の式典はシンプルに執り行われており、当日は各町総代、小・中学校長、保育園長をはじめ各種団体の代表者が出席して新成人の前途を祝福、激励している。また、会場には小・中学校の恩師も招待され、同窓会気分盛り上げるが式典は厳粛かつ盛大に執り行われている。

これからも、新成人者全員が大人としての自覚を抱き、将来を自分たちが切り開いていくという希望と責任を感じてもらえる様な式典を続けていきたいと願っている。



3-8 平成18年1月の成人式

#### 青少年健全育成会と社会を明るくする運動

明日を担う青少年が、心豊かに健やかに成長することは、子供を持つ親の願いであるとともに、校区民の願いでもある。

しかしながら、近年の青少年の非行は急激に増加する傾向にあり、その内容も今までにない凶悪なものも含め低年齢化、多様化している。また、不審者による子供への危害の心配、校区の様相の変化にともなう交通事故の

増加など、多くの問題を抱えている。こうしたことから今後、今まで以上に家庭、学校、地域の連携を強化しなければならない。

校区に住む青少年を、健やかに成長させるため、総代会が中心となり、PTAを始め各種団体と協力し家庭、学校、地域が一体となって、青少年を取り巻く社会環境を浄化し非行・交通事故の防止に努め、安全で安心して暮らせる校区づくりを推進している。

主な活動として

ア 「こどもを守る安全な校区づくり」の推進活動（夏季、冬季）

- ・校区を3コースに分けて、巡視と地域の人への啓発用のチラシを配布。
- ・広報車による校区民への呼びかけ。

イ 社会を明るくする運動の集い

- ・講演会、ビデオ鑑賞など。

ウ 交通安全、環境美化パレードの実施

警察署にも協力をお願いして、小学校の金管バンド・パトン・カラーガード部員、中学校生徒会役員及び各種団体がパレードに参加して、校区民への啓発活動を実施している。

エ 校区内巡視と広報活動

PTA、学校がチームを組み夏季休暇中に10回、冬季休暇中に4回のパトロールを実施し、トラブル防止に努めている。また、この期間中各町内でも個々に夜間パトロールを実施している。

オ 「健全育成会だより」の発行

全校区内の家庭に配布し、校区民の意識の高揚などを図っている。

#### (4) ユニークな校区の活動

吉田方校区女性ドライバークラブ 校区の女性ドライバークラブは、昭和63年（1988）6月10日、愛知県下で3番目、豊橋市内でははじめての女性ドライバークラブとして誕生し

た。当時、女性ドライバーの増加に伴い、女性の交通事故が増加傾向にあったことや、校区内に自動車検査登録所が建設され「豊橋」ナンバーが誕生したことなどを機会に発足し、豊橋市内から交通事故を追放するため「やさしい運転」と「家庭・地域から交通安全を進めよう」のスローガンのもと、今日まで活動を続けてきている。結成当初100名程であったクラブの会員も、現在では350余名となり、地域に根ざした地道な活動を行なっている。具体的には、春・夏・秋・年末の年4回行なわれる交通安全運動の際に、関係機関・団体と協力して交通安全街頭キャンペーンに参加し、交通安全意識の高揚や交通事故防止活動への取り組み等の活動を行なっている。

**豊川クリーン活動** 昭和59年（1984）に豊橋市の530運動にあわせて中学校の生徒会を中心に小学校と中学校の間の用水クリーン活動が始まった。翌年、中学校生徒会主催の校区クリーン活動が5月30日に実施され、地域との交流活動に発展した。それ以降、吉田方小・中学校、校区が一体となった校区クリーン活動が継続して実施されてきた。

平成4年（1992）校区を流れる豊川の水や河川敷、堤防が汚いことが、中学校の手作りカヌー体験活動などの際に分かり、それまでの校区クリーン活動が豊川クリーン活動に変わった。さらに小学校、中学校、校区総代会、PTAを始めとする各種団体の参加する吉田方校区豊川クリーン活動として青少年健全育成会の重要な事業となった。

この活動は「すきとおれ、川と心」をスローガンに豊川の汚れに調査や環境美化の啓発活動を通して、自然愛護や環境保全の意識の向上にも繋がっている。

**吉田方ふれあいウオーク** 平成13年（2001）に校区総代会主催で、豊川河口（豊橋市総合体育館から吉前海岸までの海岸堤防）を親子

で歩く第1回「吉田方ふれあいウオーク」が実施された。翌年以降は吉田方校区青少年健全育成会主催の事業として実施されている。親子のふれあい、児童生徒と校区民との交流が深まるなど、校区にとって有意義な秋の行事として定着してきている。

### 3 吉田方の文化財

#### (1) 野田素盞鳴神社の神楽

野田素盞鳴神社の神楽は「天王社岩戸神楽」と呼ばれている。神楽については「天照大神が岩戸隠れをされ、天鈿女命が舞いを奏で大神のみ心を和め給う」という故事があり、野田の天王社でも、祭礼には必ず御神楽を奉納してきた。

神官の古い記録によると、享保（1716年頃）以前に、神楽は幾人かの御師の太夫の手によって始められ、二百余年の長い間に及んで伝承され、野田にも伝えられたという。

以来、氏子たちが心を込めて長く絶えることなく神楽を奉納して、五穀が豊に実るように祈願することを続けて来た。

現在、祭礼に奉納する神楽は小学生によって行なわれる。まず、小学校1年生から6年生までの男子が列を作り、笹笛の調べもさわやかに、鼓を打ちながら氏子の家々を回り、回り終わると御社の大前に勢揃いして拝礼し、神楽を奉納する。神楽の内容は次のようである。

演ずるのはすべて小学校の男子児童で、巫女役の舞をする2人は化粧して白の上衣に緋の袴をつける。囃子方はいずれも青い色の袴姿で、笛を高学年の児童2人、小太鼓を低学年児童2人、大太鼓を高学年児童1人の計7人が受け持つ。座の正面には「しで」を立て、囃子方の児童が舞い座を囲み、笛・太鼓を打ち鳴らしていわゆる神楽囃子を演奏す

る。この囃子にあわせて巫女役の児童が2人、右手に鈴、左手に扇子を持って、前後左右に舞い動く。初め神殿に向って舞い、次に「しで」を拝殿外向きに移して舞う。

神楽の舞は簡単なものだが、古くから小学校の1年から6年までの男児ばかりで演じられ、伝承されてきたところに特色がある。



3-9 野田素盞鳴神社の神楽

## (2) 専願寺の大施餓鬼

初盆大施餓鬼会<sup>せがき</sup>で有名な専願寺は広くセインガン寺と呼ばれて親しまれている。

専願寺の寺伝によると、南朝後亀山天皇の忠臣、清原某が阿弥陀像<sup>おんい</sup>を笈に納めて吉野を脱出し、伊勢から海路渥美郡馬見塚の里へ来て庵を結び、南朝の殉難の霊と三界万霊のために大施餓鬼を修したのが、専願寺大施餓鬼の始まりと伝えられている。以後、長い間絶えることもなく現在に続けられている。

この大施餓鬼会は、長い間、旧暦6月30日～7月1日にかけて行なわれてきたが、昭和30年に豊橋市が隣接市町村と合併したときから新暦の月遅れ盆にあわせて、8月1日午前零時から施餓鬼法要をすることに改めた。しかし、年々開始時刻が早まってきて、現在では、7月31日午後5時30分より8月1日正午まで執り行なわれている。

十数年前までは、7月31日夜から明け方に

かけ、この大施餓鬼に参詣する人がひきもきらず、近郷近在、遠くは湖西辺りからの参詣客もあった。とくに、初盆の家では、必ず詣でて塔婆供養をして貰うことになっていて、当日は、参詣すると、新仏に再会できるとも言われている。

仏教では、生前に悪い行ないのあったものは死後に餓鬼道におちて餓鬼となり、飲食を求めて苦しむという。それで、餓鬼道におちている生類や亡者に対して食物を施し読経して供養する。このような行事が施餓鬼会であるが、今日では祖先を供養する意味合いが濃い。

## (3) 専願寺の薬師如来立像

専願寺の本堂に向かって左側に薬師堂がある。その本尊が薬師如来立像で秘仏とされ、御開帳の時以外は拝観できない。平常は厨子の扉の前に35cmほどの御前立ちが安置されている。



3-10 専願寺の薬師如来立像

本尊薬師如来立像は、像高65.5cm、台座15cm、ずんぐりとよく肥えて量感に富んでいる。印相は左手が与願印<sup>よがん</sup>、右手は施無畏印<sup>せむい</sup>で、頭上の肉髻<sup>にくけい</sup>は意外に大きい。眼は普通に開き、丸く豊かな顔、やや小さな顎<sup>あご</sup>、筋の

通った鼻、唇などはかなり写実的である。衣紋の彫りはさして深くなく、ひだの意匠もおだやかである。全像表面は荒れや虫食いのあとが見られず、両腕から垂れる衣の部分もかなり写実的である。蓮台は左右両足に踏み分けた形で近世以降に多い形式であるという。

#### (4) 山田宗徧作の阿弥陀如来立像

K町の某氏宅には山田宗徧が彫ったといわれる阿弥陀如来の立像が秘蔵されている。

この仏像は、像高39cm、肩幅11cm、蓮弁台座27cm、背面に「貞享三丙寅六月上旬、山田宗徧六十歳造立」の銘がある。右手の小指、左手の人差し指にわずかな破損があるが、光背・天蓋・厨子まで元のものである。像全面は黒褐色におおわれている。来迎印立像で、面長の顔、半眼伏目、螺髪も破損はない。

この像の作者の山田宗徧（寛永4年・1627～宝永4年・1707）は吉田藩主小笠原忠知に招かれ、同藩の茶道方として明暦元年（1655）に当地に来住した。以来、忠知・長矩・長祐・長重と4代、43年間もの長い間藩に仕えてきた。元禄10年（1697）長重が武蔵国（埼玉県）岩槻に移封になった時、宗徧は職を二世宗引に継がせ、自らは江戸隅田川畔の本所に茶室を構え移住した。

宗徧には吉田の藩士や町方にも門人が多かった。宗徧作と伝えられるものには、茶杓・花入れ・茶碗などの茶道具、琵琶・裁刀などに及ぶが、彼は、仏門の出でもあった関係か仏像も数体製作した。父母の追善のために作ったものと見られる。その中の一体が某家の阿弥陀如来立像である。この像が祀られるようになったのには、次のようないきさつがある。

吉田札木町に住んでいたころ、安永8年（1779）11月3日夜明け方、吉田本町から出火、折からの強風にあおられ、吉田宿11カ町437戸を焼失するという大火災が起こった。ところが、そのような猛火に包まれながらも某家だけは、屋敷も土蔵も無事だった。このことは奇跡的なできごとであった。それは日頃信仰している仏の御功德と考え、火災後1カ月を経た12月3日、上伝馬町の夏目平次郎家に懇請して、同家秘蔵の山田宗徧作、阿弥陀如

来立像を譲り受け、本尊として朝夕礼拝することになった。今でも同家守り本尊として厚く崇敬されている。

#### (5) 栄昌寺の馬頭観音立像

三ツ相町栄昌寺の仏像でよく知られたものに木造の馬頭観音立像がある。

像高33cm、寄木造りの小像であるが、堂々とした印象を受ける。頭部頂上に大きく馬首を頂き、その下に正面と左右両側面および、背後それぞれに面を持ち、腕は二本で、いわば四面二臂の馬頭観音像である。

一般に明王部の諸仏は憤怒の形相をしてい



3-11 栄昌寺の馬頭観音立像

るが、栄昌寺の馬頭観音は穏やかで優雅でさえある。頬は高く、正面から見ると眉はつり上がっているが、威嚇するということではない。眼は大きい四面とも伏目で、口元もきりっと締まって小さく結ばれ、優しさを漂わせて

いる。髪も束ごとにその先端が焰のゆらめきを活写したものではなく、各束は全体に一括して彫り出され、その長さも大変短く全体として藤原期の特徴を示しているようだ。両膝から下は補修のためだろうが脚の長さが不自然に感じられるほど短く、像の均衡を欠いている。この点は難点であるが、その他の部分は虫害も破損もなく、保存状態は良好であ

る。彩色が施されていたかどうかは現況からでは、窺い知ることはできない。像全体はきれいな年輪文様におおわれ、それが一層この像の美しさと優しさを現している。台座は後補とみられる。

馬頭観音信仰は平安時代から始まり、時代とともに遺品も多く、江戸時代には庶民信仰の対象として普及した。

#### (6) 野田素盞鳴神社の花鳥図絵馬

野田町の素盞鳴神社には吉田藩お抱え絵師であった稲田文笠<sup>ぶんりつ</sup>の奉納したと伝える花鳥図の絵馬がある。現在は彩色が黒ずんで判然としないが、丹念に描き込んだ色合いの中に華やかさが窺われ、創作当初の華麗さが想像される。

この作品は裏書によると、文久3年(1863)3月10日、野田村の素盞鳴神社の遷宮にあたり、文笠が描き、氏子が奉納したものである。板地着色の絵馬は、額装され縦99.0cm、横は146.7cmである。師匠である谷文晁の江戸南画の系統を受け継いだ緻密な着色画となっており、文笠の円熟期の作品として貴重なものとされている。平成5年2月16日、豊橋市指定有形文化財に指定された。

なお、野田町の法香院にも、文笠が描いた花鳥図(軸装)が秘蔵されている。



3-12 文笠の花鳥図絵馬

## 4 吉田方の人物誌

### (1) 江戸時代

**菅江真澄** 菅江真澄については柳田国男の名著『菅江真澄』(昭和17年刊行)によって、わが国の民俗学の祖として広く世に知られている。しかし、その出自については吉田領内の出身らしいということ以外、長い間不明とされてきたが、近年多くの研究者たちによってようやく明らかにされるに至った。

真澄は宝暦4年(1754)に吉田領内、渥美郡高須新田(現高洲町)の庄屋白井八兵衛の子(二男)として生まれた。本名は白井英二、他に知之・白超・秀雄なども名乗り、晩年は専ら菅江真澄を使った。彼は子供の頃から吉田札木町の豪商であり、吉田領内屈指の文化人でもあった植田義方に学問の指導を受け、その師弟の関係は生涯にわたって続いた。

天明3年(1783)の春、三河を離れ、46年4か月にもわたって、信州・奥羽・蝦夷(北海道)の地を遊歴した。その長い旅の見聞や体験を日記や地誌・随筆・図絵集にまとめたが、それらは、当時の庶民の生活の様子を知ることのできる資料として大変貴重なものとなった。その数は200冊以上におよび、その内秋田藩校明德館に納められた『菅江真澄遊覧記』89冊は重要文化財として広く知られている。



3-13 菅江真澄像

真澄の幅広い知識の基は旅に出る以前から培われていたと思われ、とりわけ前述のように子供の頃から教えを受けた札木の植田義方については彼自身が「学びの親」ということでわかるように、学恩を深く感じていたようである。それを裏書するように、この遊歴中に入手した「オロシャ（ロシア）の銀貨」をはじめ「陸奥真野萱原尾花」「松前鶴之思ひ羽」など珍しい民俗的な品々を、日記の草稿と共に、師の植田義方に送っている。

こうして、真澄は異郷にありながら植田義方には変らぬ音信を続けてきたが、故郷の高須には一度も帰ることなく、文政12年（1829）7月、旅先の出羽国角館で亡くなった。齢は76歳、墓は秋田県角館市にある。

**稲田文笠** 稲田文笠は渥美郡野田村（現在の野田町）出身で、幕末に吉田藩御用絵師として活躍した画人である。

彼は、文化5年（1808）野田村の農家に生まれた。幼名佐吉郎、名を林広といった。9歳のときから、同村法香院の住職遵的に書を学んだが、生まれつき絵が好きで、文政11年（1828）江戸に出て、旗本・小沢鉄太郎や医師の家に奉公しながら内藤松嶺・狩野探玄に絵を学んだ。文化13年、そのころ高名であった画師谷文晁を知り、今度はその内弟子となって絵の道に励んだ。

その後、文笠は天保3年（1832）に奥州へ、また5年には伊勢・伊賀（現三重県）・大和（現奈良県）へ、さらには畿内地方へと再三各地を遊歴し、写生を行なった。

天保8年（1837）同郷の渡辺兵九郎の娘と結婚し、翌年吉田呉服町に住んだが、弘化2年（1845）には再び野田村に家を構え、吉田の画人として活躍するようになった。

安政元年（1854）、吉田藩から地震で破損した吉田城二の丸御殿の書院襖絵の修復を依頼され、見事な竹の絵を描いてその力量を

認められた。その結果褒美として苗字帯刀を許され、絵の具料として白銀3枚をもらうようになった。はっきりした事はわからないが、これを機に吉田藩の御用絵師となったようである。

安政6年（1859）改めの『松平伊豆守家中分限帳』に、御出入御絵具摺式人扶持稲田文笠とあり、絵画を好んだ藩主松平信古（雅号松峰）の師として重用されていたことが『吉田藩日記』の随所に記されている。

文笠の画風は、南画風で、しかも緻密な着色画から筆法の鋭い水墨画まで描くという幅の広さを持っていた。山水・花鳥を得意とし



3-14 谷文晁の描いた稲田文笠

たが、人物画もよく描いた。“谷文笠”という落款銘の「三尊像」、若描きの「浪に鳥図」、緻密な画としての「松鶴図」・「牡丹に孔雀図」・「海堂寿帯鳥図」、佐藤斉勝の求めに応じて描いた「山本斉培像」、渡辺華山のヒポクラテス像を模写した「ヒポクラテス像」、「夏山漁楽図屏風」などが代表的な作品とされている。

文笠は、恩田石峰が亡くなった弘化4年（1847）以後は、幕末の吉田で活躍した絵師



の中では第一人者となった。しかし、二人の息子を早く亡くすなど家庭的には不遇のうちに明治6年(1873)8月26日、66歳で没した。

なお、野田町の法香院には、慶応4年(1868)、文笠が生前に建てた墓碑があり、その背面には自ら描いた「出山之釈迦」が見事に彫りこまれている。

**宮路恒雄** 名は藤助、恒雄は雅号である。歌人として知られた恒雄は寛政7年(1795)高須新田に生まれ、幼い時から才能すぐれ、特に歌道を好み、吉田藩の中山美石・岩上とわ女の両師の教えを受け、この道を極めた。源氏物語に魅せられ、愛読は数度に及び研究を深めた。同郷に住む同じ国学の先輩植田七三郎(元締めでもあった)とはかねてから親交があったが、晩年、植田七三郎にはかつて高洲地内の豊川河口に臨む景勝の地(西の山)に別荘を建て閑居した。

今、高洲町の集落を西に出ると広々と田畑がひろがり、その北の方、豊川河口の堤防の近くにやや小高いところがある。そこに恒雄



3-15 恒雄の屋敷があった辺りの景色

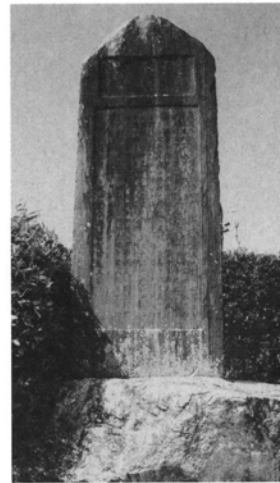
の屋敷があったという。近所の者は西屋敷(あるいはお茶井戸)と呼んでいた。今はもう、跡形もなくなっている。

恒雄はその後病に臥して、明治3年(1870)12月22日死去。享年76歳。墓は高洲共同墓地にある。墓石の裏面に、次のような恒雄の辞

世の歌が刻まれている。

「源氏物語を年ごろ読たりしを病の床にふしながら尚思ふことありて  
五十あまり四つの巻またくりかへし見しもはかなき夢の浮橋」

## (2) 明治～大正時代



3-16 渡辺泰蔵頌徳碑

**渡辺泰蔵** 三ツ相町、栄昌寺の門前に郷土の社会教育の先覚者渡辺泰蔵の頌徳碑が建っている。

泰蔵は安政6年(1859)10月15日、渥美郡野田村の渡辺兵九郎の4男として生まれ、三ツ相村の渡辺喜太郎の養子となった。

若い時から徳望篤く、22歳の時には三ツ相村の総代と学務委員を務めた。後に村会議員、助役など公共の要務に推されたほか、一徳会を作り、毎月10日には村内の老若を栄昌寺に集めて善導に努めた。また、水産自治を始めとし、公共に奉仕すること40年、ことに福利の増進、民風の改善などに精進し、村益に貢献したが、大正15年(1926)10月2日病により68歳で亡くなった。後、昭和8年8月3日、その徳を称えて栄昌寺門脇に頌徳碑が建てられた。

**浅野間清助** 清助は弘化2年(1845)6月19日、渥美郡吉田方村高須新田に生まれた。その先祖は高須新田が開発された時、吉田宿の札木から移住してきた七郎左衛門である。その孫に当たるのが清助で、彼は明治8年(1875)には31歳で高須新田の副戸長を務め、翌9年8月豊田村七番区長になり、13年には村会議員、17年には渥美郡第二部落連合村会

議員を歴任した。

篤農家であったばかりでなく、身をもって青年を指導薫陶し、従来の農耕では時勢に遅れるとあって、先進地へ度々青年たちを引き連れ、視察研究させた。また、四国から技術のすぐれた人を招いて指導を受け、自らも率先して栽培し、今まで渥美郡で栽培されていた煙草・藍などが下等品ばかりであったのを、未曾有の優良品質と認められるまでに引き上げた。そのため、各地から視察に来るほどになり、吉田方は煙草や藍の生産地としての声価が高まった。清助はその功を認められて郡から度々感謝状を受けた。没年は不詳。

**中村風声** 風声の名は中村幸三郎、明治17年(1884)10月17日、野田村(現野田町)に生まれた。生来、聡明で吉田方小学校卒業後は東京に出て苦学した。

明治39年(1906)12月1日、歩兵第18聯隊に入隊、41年11月帰休退營の身となる。除隊するとかねてから志していた新聞界に入り、新朝報記者として活躍、つとに青年の指導に努力し各地で講演し好評を博していた。また、余暇には脚本を書き『薄命な女』『濁流』『鎮守の森』『断腸』などを続々と発表上演し、風声の名はとみにあがることになった。

大正5年(1916)12月、新朝報社を退社し、翌6年2月11日豊橋日日新聞を創刊し、「奮闘は吾人の生命也」を社の方針として、自ら



3-17 中村風声の墓

社長兼編集長兼広告取兼新聞配達夫として文字通り実行し、社員もまたこれに追随したので、社運は隆々と発展して、数年たたぬうちに豊橋日日新聞は豊橋第一

の発行部数を数えるようになった。

しかし、彼は、大正12年(1923)10月3日突然に世を去った。病床にあることわずか3日、訃報を聞いた人は皆一度は耳をうたがったという。墓は野田法香院にある。

### (3) 大正～昭和時代

**大林和助** 和助は明治5年(1872)5月25日に石巻村の小柳津家に生まれ、吉川村(現吉川町)の大林文作家の養子に迎えられた。成長するにしたがって、家業の養蚕に励み、其の技術の研究にも心を傾けた結果、当時の県下養蚕業界の中でも養蚕の権威者として注目される存在となった。



3-18 大林和助

明治41年(1908)に、吉田方養蚕者組織組合を起こし、蚕種の生産を始め、後、組合の代表者となった。同44年より、これを個人経営に組織変更して事業の拡大をはかった。当

初種枠5,000枚ほどを産出していたが、昭和8年(1933)ごろには種枠85,000枚内外を産出するまでに事業が発展した。事業範囲も地元愛知県だけにとどまらず、岡山・九州各県さらには一時期、八丈島や台湾にまで種枠の販路を広げた。こうして、東三河最大の蚕種製造事業所となり、和助自身も愛知県蚕種組合東三支部長の要職に推された。

一方、地方自治に関する面でも、早くからその存在が認められ、吉田方村村会議員・渥美郡会議員・牟呂吉田村村長などを歴任し、牟呂吉田村が豊橋市に合併すると同時に、吉田方校区最初の市議会議員に立候補し、見事当選し、昭和7年10月10日から昭和19年2月

27日にいたる3期11年余にわたって、議員として選挙民の期待にこたえ、市政に貢献した。その間、昭和11年10月26日より昭和15年10月9日までの4年間は市議会議長として、手腕を発揮し、校区民はもとより全市民の代弁者としてその期待に応えてきたが、惜しくも昭和19年2月27日、3期目の任期あと8カ月を残してこの世を去った。

**遠藤安太郎** 安太郎は明治元年（1868）10月21日吉田方の高須新田に生まれ遠藤家の養子に迎えられた。養父は関屋町で三等郵便局長をしていた。安太郎も22年に同じ局の局長となった。さらに28年には東三三等郵便電信局長協議会会長を務めた。後豊橋実業界に入り、若くして豊橋市実業界で注目される存在となった。



3-19 遠藤安太郎が構想した百花園

明治35年（1902）3月、彼は豊橋商業会議所の会頭となり、かねてから自らの三大事業としていた商工品陳列館、商業学校、豊橋ホテルなどの建設にとりかかった。商工陳列館は、39年現在の松葉公園あたりに建設された。これは、商工業製品を多数展示して需要に応じ、質の向上を図るのが目的であった。私立豊橋商業学校は私費を投じて渥美郡豊岡村（現在の瓦町）に建設された。また豊橋ホテルは公会堂と料亭を兼ねたもので43年に関屋町の旧百花園跡に建設された。

このように安太郎は積極的に新企画を打ち出し、豊橋実業界で地元業者の利害の代弁者として活躍したが、その構想が市の政財界に容れられぬ事が多くなり、42年ついに商業会議所を去ることになった。そして不運にも、それから間もない大正2年（1913）12月30日、45歳の若さで生涯を閉じた。

**伊藤要蔵** 伊藤要蔵は明治6年（1873）渥美郡赤羽村大字越戸で伊藤七右衛門の長男として生まれた。若くして、母校若戸小学校の代用教員となり、独学で正教員の資格をとり、田原中部小学校、高師小学校の訓導を歴任、明治42年（1909）35歳の若さで吉田方尋常高等小学校長となった。

要蔵は赴任すると、本職の児童の教育はいうまでもなく、村の青年男女の指導育成にも力を入れ、率先して生活体験に訴える実践を開始した。まず、校長宅のある馬見塚村の青年を説いて早起会を始め、早朝の5時、住宅の回りで藁ぞうりや、わらじ作りを体験させ、作業が終わると、一同座敷に正座させ、30分間の訓話をして帰宅させるという具合であった。この他、伊藤校長の実践したユニークな教育活動には次のようなものがあった。

- ・卒業生で社会的に成功したような人材を母校に招いて講演をさせ在校生に聴かせ、教化の一助とした。
- ・夏休み中、同窓会会員による奉仕作業で校庭を埋め立て校地を拡張した。
- ・毎年寒に入ると始業前に全校いっせいに校長始め生徒教員一体となって、学校前の農道約1 kmを走る事を年中行事とした。

このようにして、要蔵は実に17年間にもわたって学校内外の教育活動で、ユニークな実践を進め、異色ある校長として校区民の信望をあつめた。

退職後要蔵は校区の要望を担って豊橋市議會議員に選出され、三信鉄道（現JR飯田線）

の全通、吉前海水浴場の開発発展などに全力を注いで東奔西走したが、昭和10年（1935）3月16日市議会議員在任中帰らぬ人となった。**高須森征衛** 高須森は、本名久曾神征衛、明治15年（1882）6月10日高須村（現高洲町）に生れた。青年時代の明治35年、角力界に入り、生業の傍ら精進して若者頭、頭取を経て昭和3年（1928）東三八幡講相撲協会を取締役頭取に推薦され、昭和30年（1955）退いて顧問となった。



3-20 高須森記念碑

高洲町には、力士「高須森」の立派な碑がある。31年9月に建立したもので碑面には高須森の功績が記してある。それによると、高須森の先祖は豊臣家に仕える小林という姓の武士だった。馬之右衛門のとき故あって馬見塚村に来て定住した（墓は専願寺にある）。その後小林惣右衛門が分家、さらに小林元友が分かれて神官となり、久曾神と改姓した。高須森はその6世にあたる。

さて、八幡講相撲協会の顧問となった高須森は、時の青少年の精神修養や体育の向上に力を尽くした。後、その功績を認められ30年10月、豊橋体育協会より表彰された。このことを受け、翌年3月、高洲町が勸進元となって、高須森引退披露相撲が盛大に催された。

なお、吉田方校区には、八幡講相撲協会員として、高須森の指導を受けた力士、若者頭小緑栄、三ヶ森多作らが育っていた。小緑栄は行司を勤めることもでき、その相撲甚句は有名だった。ちなみに、高須森は元愛知大学学長久曾神昇（ひたく）氏の父君である。

**山口唯次** 山口唯次は、明治38年（1905）6月12日、山口要作・なみの長男として生まれた。大正13年（1924）名古屋市立第二商業学校を卒業し実業を学んだ。当時城海津で製糸業を営んでいた父要作が、昭和9年（1934）菰口に山口毛織を創設、ここで毛織の技術を体得した唯次は、昭和21年（1946）、山口毛織株式会社取締役社長となった。



3-21 山口唯次

戦後の経済的な苦境に直面したが復興の気運が高まり・毛織物への強い需要に支えられ、昭和27年には中野町に梳毛工場を建設し急速に業績を拡大させた。

彼は社長としての経営に専念するだけでなく、豊橋市の経済界や毛織物業界でも、その発展のために積極的に力を尽くした。誠実な人柄を買われて、昭和35年には、日本毛織物工業連合会理事、同40年には全国毛織物工業組合連合会理事に就任した。一方、昭和35年から同43年の間、豊橋商工会議所会頭を務めた。さらに同43年、豊橋乾蘭取引所理事長、翌44年には、豊橋市社会福祉協議会理事に就任した。

社内においては、社長でありながら気さくに従業員に接し、親譲りの敬神崇祖の心を、目立たぬ自然なかたちで社内に浸透させていった。同社には「やまけ」会という従業員の親睦組織があるが、工場閉鎖後の今日でも、年に一度は相集い山口社長を偲びあい親睦を深めているという。

こうして彼は、織物という物づくりの技術を厳しく追求し続ける一方で、従業員のこのころを育てることにひそかに努めてきたが、昭和62年（1987）年9月17日に亡くなった。

## 教育関連資料

## 吉田方小学校の変遷

○学級数の( )内は高等科 ○明治25年以前と空欄の個所は不詳

年度	職員数	学級数	児童数	校長
明治 26年				石原久太郎
27年				
28年			206	
29年	4			
30年				
31年				
32年			219	
33年			304	
34年			309	
35年			281	
36年			251	
37年		3 (1)	292	
38年			292	
39年			227	
40年				片尾 千吉
41年				林 茂
42年			314	
43年			345	伊藤 要蔵
44年			403	
大正 元年			453	
2年			421	
3年			434	
4年			457	
5年			452	
6年			458	
7年			447	
8年			451	
9年			447	
10年			461	
11年			455	
12年			439	
13年			438	
14年			427	
昭和 元年			447	坂柳 夏次
2年			454	
3年			490	
4年			499	
5年			478	鈴木 澄江
6年			469	
7年			555	
8年	13	8 (2)	504	
9年	14	8 (2)	528	
10年	14	9 (2)	561	山本 松緑
11年	14	9 (2)	589	
12年	14	9 (2)	605	太田 房治
13年	15	9 (3)	596	
14年	15	10 (3)	605	
15年	17	11 (2)	586	丸地 文男
16年	17	11 (3)	615	
17年	18	12 (3)	652	
18年	18	12 (3)	651	
19年	19	12 (4)	715	
20年	20	12 (4)	808	
21年	19	12 (4)	846	
22年	13	12	662	
23年	15	12	654	山本喜苦子
24年	16	12	657	

年度	職員数	学級数	児童数	校長
昭和 25年	15	12	670	山本喜苦子
26年	15	12	647	
27年	15	12	606	内藤 幸保
28年	15	12	605	
29年	15	13	622	
30年	17	14	656	野口祐太郎
31年	16	14	687	
32年	16	14	698	
33年	18	15	697	
34年	18	14	682	
35年	17	15	637	
36年	17	13	610	角谷 栄
37年	17	14	609	
38年	18	15	645	
39年	20	17	670	前田 忠男
40年	21	18	659	
41年	21	18	661	
42年	22	18	691	
43年	22	18	739	
44年	23	19	757	
45年	25	20	808	
46年	27	22	846	
47年	28	23	878	兵藤 猛
48年	29	24	919	
49年	29	24	947	
50年	30	24	981	栗原 真一
51年	31	25	991	
52年	31	25	1020	
53年	33	28	1066	
54年	35	29	1123	小澤 育男
55年	36	30	1173	
56年	35	29	1155	
57年	35	28	1146	
58年	33	27	1121	中沢 賢二
59年	32	26	1082	
60年	31	25	1020	
61年	31	24	960	
62年	31	24	923	
63年	30	24	915	大林 信義
平成 元年	32	24	880	
2年	33	25	889	
3年	33	25	881	
4年	33	25	853	杉浦 吉男
5年	31	24	812	
6年	30	23	809	小松 博一
7年	29	24	821	
8年	32	23	795	
9年	29	24	795	
10年	30	24	807	
11年	30	24	834	
12年	29	24	836	平松 英樹
13年	31	25	861	
14年	34	26	910	
15年	35	27	953	天野 明彦
16年	38	28	1010	
17年	38	29	1050	
18年	38	30	1084	

### 吉田方中学校の変遷

年 度	職員数	児童数	校 長
昭和 22 年	12	204	池田 賢次
23 年	14	279	
24 年	13	322	高木 和一
25 年	15	323	
26 年	16	306	
27 年	17	313	
28 年	15	328	居井 直胤
29 年	14	331	
30 年	14	321	向坂 寅男
31 年	13	311	
32 年	13	297	大森 連
33 年	14	273	
34 年	14	285	
35 年	15	320	
36 年	17	395	
37 年	16	424	
38 年	16	410	村田 誠一
39 年	18	384	
40 年	18	356	
41 年	18	355	
42 年	18	342	鳥居 孝一
43 年	18	333	
44 年	18	342	
45 年	19	351	藤田毅一郎
46 年	19	352	
47 年	19	360	
48 年	21	379	
49 年	22	414	
50 年	22	435	
51 年	23	464	長坂 孝雄
52 年	24	469	
53 年	24	498	村田 象
54 年	24	497	
55 年	24	514	宮路 春美
56 年	26	534	
57 年	29	577	
58 年	29	587	
59 年	28	610	市川 富夫
60 年	28	611	
61 年	28	617	
62 年	26	587	
63 年	26	557	岩城 幸夫
平成 元年	26	530	
2 年	26	515	
3 年	26	493	藤城 和彦
4 年	26	468	
5 年	24	428	
6 年	24	427	
7 年	24	411	川口 乙八
8 年	26	440	
9 年	27	432	野尻 一美
10 年	26	431	
11 年	26	392	竹本富士夫
12 年	26	415	
13 年	26	399	
14 年	29	409	
15 年	29	382	
16 年	29	380	
17 年	30	413	高井 鉄伸
18 年	30	437	

### 歴代PTA会長一覧

年 度	吉田方小	吉田方中
昭和 23 年	高橋 謹吾	中島 敏次
24 年	〃	〃
25 年	渡邊喜三郎	杉浦 寛
26 年	〃	〃
27 年	〃	中島 仙次
28 年	大林 重治	大久保一二
29 年	〃	近藤五代次
30 年	〃	杉浦 志郎
31 年	倉地 皓弐	〃
32 年	〃	藤城 武
33 年	西土 繁次	高橋 篁
34 年	金子 会知	倉地 皓弐
35 年	〃	〃
36 年	〃	〃
37 年	林 栄一	大林 重治
38 年	〃	小林美寿儀
39 年	〃	林 茂
40 年	〃	大林 二郎
41 年	〃	〃
42 年	稲田清四郎	藤城 珍次
43 年	〃	〃
44 年	〃	安藤 由蔵
45 年	〃	大林 二郎
46 年	〃	河村 史郎
47 年	〃	〃
48 年	〃	林 栄一
49 年	伊藤 久夫	藤城 衛治
50 年	〃	〃
51 年	〃	馬場 司行
52 年	〃	〃
53 年	竹本 佳次	大林 正明
54 年	渡邊 治	〃
55 年	白井 朝年	杉浦 欣司
56 年	山口 幹夫	堀田 茂男
57 年	近藤 信興	大須賀健司
58 年	藤田 恭弘	中村 豊孝
59 年	北河 重春	中林 英雄
60 年	黒柳 光雄	田中 繁男
61 年	鈴木 正三	岡村 正治
62 年	荒木 正視	高木 信彦
63 年	竹内 清人	中川 静吾
平成 元年	藤城正八郎	加藤健之助
2 年	林 幹政	小林 佳雄
3 年	中沢 賢一	渡部 茂久
4 年	宮瀬 哲也	高橋 隆實
5 年	伊藤 光夫	〃
6 年	山崎 利之	瀧川 友仁
7 年	荒木 哲世	藤城 和生
8 年	平野 正博	林 孝悦
9 年	金田 隆博	森ノ内克明
10 年	内田 哲史	西土 和夫
11 年	伊藤 賢	荒木 充廣
12 年	〃	高橋 伸治
13 年	稲田 充男	伊庭 文敏
14 年	山本 貴浩	彦坂 克昌
15 年	〃	〃
16 年	平川 裕司	稲田 充男
17 年	〃	〃
18 年	土倉 啓彰	鈴木 秀典

## 参 考 文 献

## 第1章 自然と環境

- 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書  
豊橋市 H13
- とよはしの巨木・名木100選  
豊橋市 H17
- 母なる豊川 流れの軌跡  
中部建設協会豊橋支所  
建設省豊橋工事事務所 H10
- 定本 豊川  
(株)郷土出版社 H14
- 三河地震 60年目の真実  
木俣文昭・林 能成・木村玲欧  
中日新聞社 H17
- 豊橋洪水ハザードマップ  
豊橋市 H16

## 第2章 歴史と生活

- 吉田方の沿革  
林 泉佑 S31
- 古今和歌集への道  
久曾神昇  
思文閣出版 H16
- 牟呂吉田村誌  
白井梅里  
白井政史 S 8
- 三河文献集成 上世・中世・近世上下  
久曾神昇(上世・中世) 近藤恒次(近世)  
愛知県宝飯地方史編纂委員会 S38~41
- 豊橋整地事業誌  
豊橋整地事業誌編纂委員会  
豊橋整地協会 S34
- 愛知大学総合郷土研究紀要第4集  
編集者代表 横山将三郎  
愛知大学総合郷土研究所 S33
- 渡邊家文書 頁租1  
愛知大学総合郷土研究所  
愛知大学 S52

- 角川日本地名大辞典 23 愛知県  
「角川日本地名大辞典」編纂委員会  
角川春樹 H2
- 豊橋温室農業協同組合創立70周年記念誌  
豊橋温室農業協同組合 H11
- 愛知の海苔 のり共販40周年記念  
愛知県漁業協同組合連合会 H 6
- 愛知の稲 水田農業の移り変わり  
愛知県 H 3
- 牟呂史  
牟呂史編纂委員会 H 8
- 豊橋総合卸センター十年史  
協同組合豊橋卸センター S55

## 第3章 教育と文化

- 豊橋教育の源流  
夏目定寛 H 8
- 愛知県教育史 第3巻・第4巻  
愛知県教育委員会 S48
- 三十五年誌(吉中35年の歩み)  
吉田方中学校 S57
- 50周年記念誌  
吉田方中学校 H10
- ふるさとの仏像—東三河  
東三文化会  
豊川堂 S54
- 賀茂真淵と菅江真澄  
近藤恒次  
橋良文庫 S51

## 各章共通

- 創立百周年記念誌 吉田方小学校 S47
- よしだがた 郷土学習読本  
吉田方小学校 H 8
- 豊橋の風景  
豊橋市美術博物館 H18

# 編集後記

平成16年10月、市制施行百周年記念事業の一環として、総代会が校区ごとに校区史を作成することになり校区総代会長を中心にメンバー（編集委員）を構成することになりました。当校区でも総代会にて鳩首協議の結果、別記の様な体制で編集委員会が発足しました。

爾後、内容のプロット立てについてとか、頁数、経費を制限された中で、編集委員の多大なご尽力、ご協働によりやっと「校区のあゆみ吉田方」をまとめあげることができました。ひとえに関係各位のご支援と編集委員の皆様のご尽力のお陰と心より感謝申し上げます。拙い小著ではありますが、校区の皆様の郷土理解の一助にでもご利用いただければ編集委員一同、望外の喜びとするところであります。

なお文末になりましたが、資料の提供等ご指導ご協力下さった方々に対しここに改めて厚くお礼申し上げます。

編集委員長 佐藤高名

## 吉田方校区史編集委員

青木 弘二（産業担当）  
伊藤 勝（関連写真担当）  
大林 正明（顧問一元校区総代会長）  
倉知 広定（関連写真担当）  
小林 理（総括責任者一元校区総代会長）  
佐藤 高名（編集委員長一元菰口町総代）  
塩田 善之（歴史と生活担当）  
白井 良和（第3章一元教育と文化責任担当）  
鈴木 孝示（産業担当一元吉前町総代）  
丹羽 洋章（校区活動担当一元豊橋市議会議員）  
村田 勇美（歴史と生活担当）  
森田 昶生（第1章一元自然と環境責任担当）  
渡辺 英夫（第2章一元歴史と生活責任担当）  
村田 理行（豊橋市役所職員一元サポーター）

（五十音順）

### 校区のあゆみ 吉田方

平成18年12月25日発行

編集 吉田方校区総代会  
吉田方校区史編集委員会  
発行 豊橋市総代会  
印刷 共和印刷株式会社

R2100  
当紙配合率100%の再生紙を  
使用しています。







